

## 第 1 部 招致活動記録

## 第1章 日本招致に向けての意思決定

### 1.1 JFA2005年宣言

2005年元旦、財団法人日本サッカー協会（以下「JFA」という）は、2050年までの日本サッカー界の中長期的な指針として、「JFA2005年宣言」を発表した。

「JFA2005年宣言」は、「DREAM～夢があるから強くなる～」というスローガンのもと、JFAの理念及びビジョンを宣言するとともに、「JFAの約束2015」、「JFAの約束2050」を掲げ、中長期における具体的な到達目標を明らかにしている。

特に、「JFAの約束2050」では、

「2050年までに、すべての人々と喜びを分かち合うために、ふたつの目標を達成する。」

とし、

「FIFAワールドカップを日本で開催し、日本代表チームがその大会で優勝チームとなる」

ことを掲げている。

すなわち、この時点で既に、JFAとしての将来におけるFIFAワールドカップ™招致の意思決定は確認されていたと言える。

2002年6月、韓国と共同開催した2002年FIFAワールドカップ™は、人々に大きな感動を与えるとともに、サッカーの持つ根源的な素晴らしさを伝えることができた。海外の多くのメディアが、連日大会の熱狂を伝えるとともに、日本の大会運営能力の高さ、ボランティア・サポーターをはじめとする日本人が、国のわけ隔てなくフレンドリーに交流する姿をこぞって報道した。

そして大会後、FIFAからは「笑顔のワールドカップ（World Cup of Smiles）」との、最大級の賛辞が与えられた。

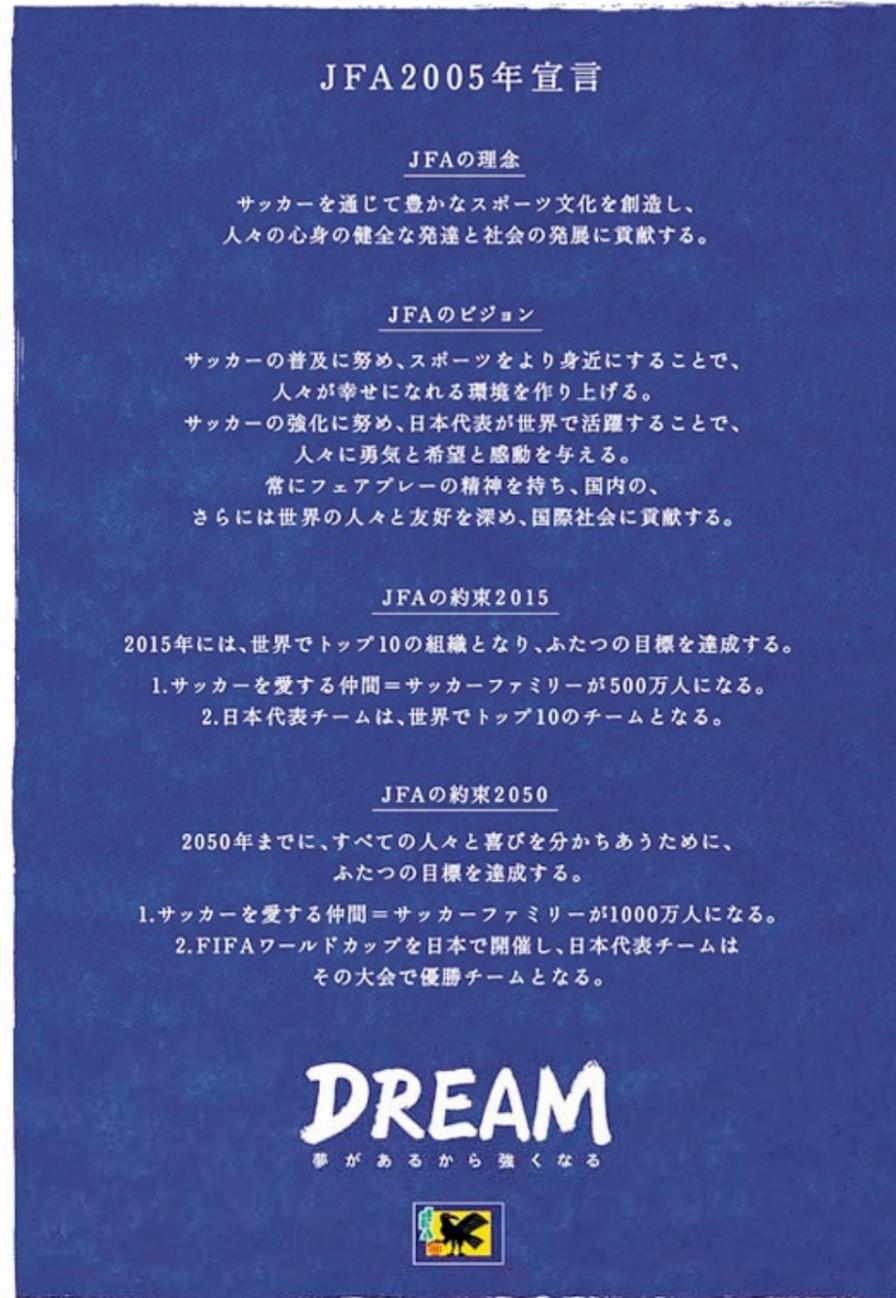
その2002年大会から16年後ないしは20年後となる、2018/2022年FIFAワールドカップ™の日本招致は、FIFAワールドカップ™の単独開催を目指すJFAにとって、自然な選択であり、必然的な決断でもあった。

それは同時に、「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。」という、JFAの理念とも合致するものであった。



2002年大会では、スタジアムや街のあちこちで海外のサポーターたちとの交流が図られた。

JFA2005年宣言



**1.2 FIFAワールドカップ招致検討委員会の設置**

2007年11月8日、JFA理事会において、FIFAワールドカップ招致検討委員会（委員長：小倉純二 JFA副会長）の設置が決定した。

この決定に先立つ同年10月29・30日、スイス・チューリヒで開催された国際サッカー連盟（以下「FIFA」という）理事会は、従来から採用してきたFIFAワールドカップ™ホスト国の大陸ローテーション方式の廃止を決定。併せて、直近の2大会のホスト協会が所属する大陸連盟は、次回大会に立候補できないこととし、それ以外の全地域からの立候補を認めることを決定した。

この新たなルールに従えば、「JFA2005年宣言」に掲げる目標の2050年までに、日本でFIFAワールドカップ™を開催する機会は最大でも3回しかない。「JFAの約束2050」を実現するためのチャンスは、決して多くは残されていないことになる。

JFA内にFIFAワールドカップ招致検討委員会が設置されたものの、同委員会は、あくまで今後の

招致時期及び招致戦略について検討することを目的とするものであった。すなわち、FIFAワールドカップ™日本招致を、JFAとして直ちに機関決定することを意味するものではなかった。

しかし、FIFA理事会の決定を踏まえ、最短では2018年大会の招致も視野に入れ、日本招致の可能性について検討が行われることとなった。

第1回FIFAワールドカップ招致検討委員会は、2007年12月20日JFAハウスにおいて開催された。冒頭、委員長の小倉純二 JFA副会長から、委員会設置の趣旨及び目的について説明があり、その後、各委員による活発な議論が展開された。

こうして、2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致に向けて、活動の第一歩が踏み出された。

FIFAワールドカップ招致検討委員会は、その後2009年5月まで4回にわたり開催された。FIFAワールドカップ™日本招致に向けて、FIFAをはじめ海外及び国内の様々な条件、状況を分析するとともに、大会理念・コンセプトの検討が行われた。

FIFAワールドカップ招致検討委員会開催実績

開催回	開催年月日	議事内容
第1回	2007年12月20日	1. 2018年以降のワールドカップ開催国について 2. 2010年南アフリカ大会について 3. 今後の活動について
第2回	2009年2月18日	1. 2018/2022年FIFAワールドカップ開催国決定手順について 2. 2018/2022年FIFAワールドカップ開催希望国について 3. FIFAワールドカップ開催基準について 4. 今後の活動について
第3回	2009年4月16日	1. FIFAワールドカップ招致をとりまく状況について 2. 招致活動進捗について 3. 大会理念・コンセプトについて 4. 招致活動組織について 5. 今後の活動について
第4回	2009年5月25日	1. 招致活動進捗について 2. 招致契約書・開催契約書について 3. 大会理念・コンセプトについて 4. 招致活動組織について 5. 今後の活動について

FIFA ワールドカップ招致検討委員会メンバー（敬称略、所属・肩書きは当時 2009年5月22日現在）

役職	氏名	所属
委員長	小倉 純二	財団法人日本サッカー協会 副会長・FIFA 理事
委員	北澤 豪	財団法人日本サッカー協会 理事
	濱口 博行	財団法人日本サッカー協会 国際委員（株式会社電通）
	日比野 克彦	東京藝術大学
	森 健良	外務省 総合外交政策局 総務課長
	山本 浩	法政大学
	田嶋 幸三	財団法人日本サッカー協会 専務理事
	羽生 英之	社団法人日本プロサッカーリーグ 事務局長
幹事	真田 幸明	財団法人日本サッカー協会 総務部長
	渡辺 真人	財団法人日本サッカー協会 代表チーム部長
	貝瀬 智洋	財団法人日本サッカー協会 国際部係長・WC 招致本部
	川瀬 みどり	財団法人日本サッカー協会 事業部
招致本部	五香 純典	財団法人日本サッカー協会 PHQ/WC 招致本部
	平井 徹	財団法人日本サッカー協会 代表チーム部係長/WC 招致本部
	鈴木 康恵	財団法人日本サッカー協会 WC 招致本部
	大西 貴子	財団法人日本サッカー協会 WC 招致本部
	林 信貴	財団法人日本サッカー協会 WC 招致本部（株式会社電通）
	永松 繁隆	財団法人日本サッカー協会 WC 招致本部（株式会社電通）
オブザーバー	丸山 市郎	外務省 広報文化交流部 人物交流室長
	加賀山 公	財団法人日本サッカー協会 事業部長
	松田 薫二	財団法人日本サッカー協会 広報部長
	奥田 泰久	財団法人日本サッカー協会 総務部長代理
	志水 かず美	財団法人日本サッカー協会 総務部係長

### 1.3 FIFAワールドカップ™招致プロセス

2009年1月22日、JFAはFIFAにFIFAワールドカップ™の「招致意思表明フォーム」を提出した。「招致意思表明フォーム」は、FIFAがワールドカップ招致に関心を寄せる各国協会に対し、招致意志の確認を行うため所定の書式による書類の提出を求めるものである。

同年2月2日に提出が締め切られた時点で、2018/2022年の2大会合わせて、

- ・アジア連盟：5カ国（日本、オーストラリア、韓国、カタール、インドネシア）
- ・欧州連盟：共催2グループ（スペイン/ポルトガル、オランダ/ベルギー）

単独2カ国（イングランド、ロシア）

- ・北中米カリブ海連盟：2カ国（アメリカ合衆国、メキシコ）

合計11の国及びグループが立候補の意思を表明した。

次いで同年3月16日には、2018/2022年FIFAワールドカップ™及び2017/2021年FIFAコンフェデレーションズカップの「招致登録書」をFIFAに提出した。「招致登録書」は、FIFAに対し招致プロセスに参加するための手続き及びルールに同意するものである。

以上のように、FIFAワールドカップ™の立候補に際しては、FIFAにより様々な招致プロセスが設けられている。これらの各プロセスを経て、最終的に2010年12月2日のFIFA理事会において開催国が決定されることとなる。

FIFA ワールドカップ™招致プロセススケジュール

日程	招致プロセス	国際大会スケジュール
2009年2月	招致意思表明フォーム提出（2日）	
3月	招致登録書提出（16日）	
5月	招致契約書、開催契約書受領	
6月	招致委員会形式連絡（15日）	FIFA コンフェデレーションズカップ（南アフリカ）
7月	立候補国対象ワークショップ（9日、チューリヒ）	
8月	立候補国対象個別ワークショップ（24～26日、チューリヒ）	
	招致委員会規約/内部規則草案提出期限（14日）	
9月	招致委員会設立期限（18日）	FIFA U-20 ワールドカップ（エジプト）
	行動基準遵守宣言提出期限（18日）	
	組織委員会*規約草案提出期限（30日）	
	招致マーク提出・承認締切（30日）	
	招致マーク著作権指定合意書締切（30日）	
10月		FIFA U-17 ワールドカップ（ナイジェリア）
11月		FIFA ビーチサッカー ワールドカップ（アラブ首長国連邦）
12月	招致契約書提出期限（11日）	FIFA クラブワールドカップ（アラブ首長国連邦）
	招致委員会設立保証書提出（11日）	
	招致委員会登記簿本提出（11日）	
	組織委員会*設立期限（11日）	
2010年3月	組織委員会*登記簿本提出期限（31日）	
5月	招致ブック・開催契約書提出期限（14日）	
	招致付属文書提出期限（14日）	
	確認合意書（組織委員会*）提出期限（14日）	
	招致ブック提出セレモニー（14日、チューリヒ）	
6月	招致国エキスポ（28・29日、ヨハネスブルグ）	FIFA ワールドカップ™（南アフリカ）
7月	オブザーバースプログラム（1日、南アフリカ）	
	FIFA インспекション（日本、19～22日）	
10月	FIFA 理事会にて開催国決定投票方式決定（28・29日、チューリヒ）	
11月	招致評価レポート開示	
12月	招致国プレゼンテーション（1・2日、チューリヒ）	
	2018/2022年FIFAワールドカップ™開催国決定（2日、チューリヒ）	

\*組織委員会：日本での開催が確定した後、大会の準備・運営の主体となって活動する組織。通常は、開催国としての選定後に、招致委員会を解散した上で組織委員会が設立されるが、FIFAの規定により、招致段階での設立が求められた。

### 1.4 2018/2022年FIFAワールドカップ™開催条件

2009年5月には、FIFAから招致契約書、開催契約書、開催都市契約書、スタジアム契約書、トレーニングサイト契約書及びホテル契約書などの「招致契約書類」が送付されてきた。これらの招致契約書類は、2018/2022年FIFAワールドカップ™開催におけるあらゆる条件を示したものである。

内容は、大会の形式、スタジアムなどの大会運営インフラはもちろんのこと、政府の保証、財政、組織、商業的権利のほか、社会と人の持続的な発展への貢献、環境保護など、極めて多岐にわたっ

ている。

2002年大会時の「招致契約書類」と比較しても、その範囲・内容は格段に拡大・細分化されている。特に、新たに追加された社会と人の持続的な発展への貢献、環境保護などのテーマからは、FIFAワールドカップ™の開催が、開催国はもちろんのこと国際社会に対しても多大なインパクトを持っていることを理解することができる。

2018/2022年FIFAワールドカップ™の開催に際し、FIFAが定めた競技施設にかかる主要条件は、以下の通りである。

■ 開催都市	
スタジアム	1以上
トレーニングサイト	4以上（メイン1・予備1・2チーム分） チームホテルから車で20分以内の距離に所在
交通輸送	試合日における無料公共輸送（チケット保有者、ホスピタリティゲスト、FIFAファンフェスト観客を対象）
バスおよび列車	開催都市市内での試合終了後に4時間以上の運行継続
ファンフェスト会場提案数	2以上
ファンフェスト詳細	後日提示される「FIFAファンフェストイベントマニュアル」にて規定

■ スタジアム	
提案数	12～18
観客数	40,000席以上（グループマッチ<開幕戦を除く>、ベスト16、準々決勝、3位決定戦） 60,000席以上（準決勝） 80,000席以上（開幕戦、決勝）
照明	最低2,000ルクス以上（バックアップ照明は最低1,400ルクス以上）
大型映像装置	2台以上
電力供給	独立電源を2以上
インフラ要求事項	招致プロセスにおける要求事項を「スタジアム契約書」にて規定
要求事項詳細	開催国決定以降に提示される「スタジアム要件ハンドブック」にて規定

■ トレーニングサイト	
観客席	500席以上
非公開トレーニング	可
報道会見室	100席以上
照明	500ルクス以上

■ チームベースキャンプ	
提案数	64以上
立地条件	トレーニングサイトからバスで20分以内の距離に所在
宿泊施設	70室以上のベッドルーム（チーム専用フロア） 40名収容のチーム専用会議室 70名以上収容できるチーム専用の食事会場
チームホテル使用費用	各参加加盟協会にて負担
要求事項詳細	後日FIFAより提示

#### 招致契約書類リスト

- 招致契約書（2018/2022）
  - 付属書類
    - ・招致ブック情報テンプレート
    - ・開催契約書テンプレート
    - ・招致契約に関する確認契約書テンプレート
    - ・開催契約に関する確認契約書テンプレート
    - ・政府宣言書テンプレート
    - ・政府保証書テンプレート
    - ・開催都市契約書テンプレート
    - ・スタジアム契約書テンプレート
    - ・トレーニングサイト契約書テンプレート
    - ・ホテル契約書テンプレート
    - ・法律意見書テンプレート
  
- 開催契約書（2018-2017\*）
- 開催契約書（2022-2021\*）
  - \*FIFAワールドカップ及びFIFAコンフェデレーションズカップを含む  
2018年と2022年バージョンの内容は同じ（締切日設定のみ異なる）
  
- 開催都市契約書
- スタジアム契約書
- トレーニングサイト契約書
- ホテル契約書
- 参考資料：
  - ・2010年FIFAワールドカップ メディアライツ契約書
  - ・2010年FIFAワールドカップ IT要求事項

## 1.5 2018/2022年FIFAワールドカップ™招致の概要

### 1.5.1 大陸ローテーション方式廃止の背景

FIFAワールドカップ™ホスト国の大陸ローテーション方式は、各大陸連盟の国々により公平に開催のチャンスを与えるため、また過熱する招致活動を抑制するため、2010年大会の開催国決定に際し採用された方式である。

2010年大会には、アフリカサッカー連盟（CAF）に所属する南アフリカ、エジプト、モロッコ、リビア/チュニジアの4グループ5カ国が立候補した。投票前日にリビア/チュニジアが辞退し3カ国の争いとなったが、最終的に南アフリカに決定した。

2014年大会は南米サッカー連盟（CONMEBOL）の順番であった。当初、立候補国はブラジルのみであったが、競争原理が働かないためスタジアム等の運営インフラの整備が懸念され、コロンビアが対立候補として手を上げた。しかし、後に辞退し、結局無投票でブラジルに決定した。

2018年大会は、当初の予定では北中米カリブ海サッカー連盟（CONCACAF）が開催権を持っていたが、実質的候補が米国しかなく、再度、競争原理が働かない点が懸念されるにいたった。

一方、FIFA理事の約3分の1を占めるヨーロッパサッカー連盟（UEFA）選出の理事たちからは、3回に1回はヨーロッパでの開催を望む声も上がっていた。

こうした種々の課題に対応するため、2007年10月、FIFA理事会は大陸ローテーション方式を廃止、直近の2大会を開催した大陸連盟からは立候補できないが、それ以外の全地域からの立候補を認めることを決定した。

また、同理事会では、従来1大会ずつ決定していた開催国を、2018年大会と2022年大会を同時に選考・決定することとした。

### 1.5.2 2018/2022年FIFAワールドカップ™招致立候補国

上記のFIFA理事会の決定を受け、JFAは、2018年大会及び2022年大会のいずれの大会にも立候補する方針で臨んだ。これはJFA2005年宣言に掲げた2050年までにFIFAワールドカップ™の単独開催を実現するため、限られた機会を逃さず、開催の可能性を最大にするために取られた戦略であった。

特に今回の招致においては、2018年大会及び2022年大会を同時に決定するため、多くの国が立候補に名乗りを挙げることが予想された。こうした状況にあっては、開催国決定に際しどのような投票方式が取られるかについては、なお判断を許さなかった。

その後、2018年大会をヨーロッパサッカー連盟の所属協会に限定したいとするFIFAの意向や、対立候補国の動向など様々な情勢を勘案し、2010年5月、2022年大会に絞込んで招致に臨むことを決定した。

当初の2018/2022年FIFAワールドカップ™招致立候補国は、下表に示すとおり両大会合わせて11グループ（13カ国）に上った。その後メキシコ、インドネシア両国が招致から撤退し、最終的には9グループ（11カ国）の争いとなった。

また、2010年9月にはFIFAの調整等もあり、最終的に2018年大会は欧州サッカー連盟に所属する4グループ（6カ国）から、2022年大会はアジアと北中米カリブ海両大陸連盟に所属する5カ国の中から開催国を決定することとなった。

### 1.5.3 2018/2022年FIFAワールドカップ™開催国の決定方法

開催国の決定は、2010年12月のFIFA理事会において、24名のFIFA理事の投票によって行われる。投票に際しての評価基準は、基本的には2010年5

月14日にFIFAに提出した「招致ブック」を含む「招致契約書類」、及び2010年7月から9月にかけて実施されたFIFAインスペクショングループによる調査に基づく評価レポートである。

FIFA理事による投票方法については、2010年10月28・29日に開催されたFIFA理事会において決定した。

※開催国決定の投票方法の詳細については、第1部第11章（p.127）を参照。

2018/2022年FIFAワールドカップ™招致立候補国

大陸連盟	国名	開催希望年	備考
アジア	日本	2018/2022年	2010年5月、2022年に一本化
	オーストラリア	2018/2022年	2010年6月、2022年に一本化
	韓国	2022年	
	カタール	2022年	
	インドネシア	2018/2022年	2010年3月、招致活動から撤退
欧州	イングランド	2018/2022年	2010年10月、2018年に一本化
	ロシア	2018/2022年	2010年10月、2018年に一本化
	スペイン/ポルトガル	2018/2022年	
	オランダ/ベルギー	2018/2022年	
北中米カリブ海	アメリカ合衆国	2018/2022年	2010年10月、2022年に一本化
	メキシコ	2018/2022年	2009年9月、招致活動から撤退

## 第2章 招致に向けての準備・プランニング

### 2.1 FIFAワールドカップ招致本部の設置

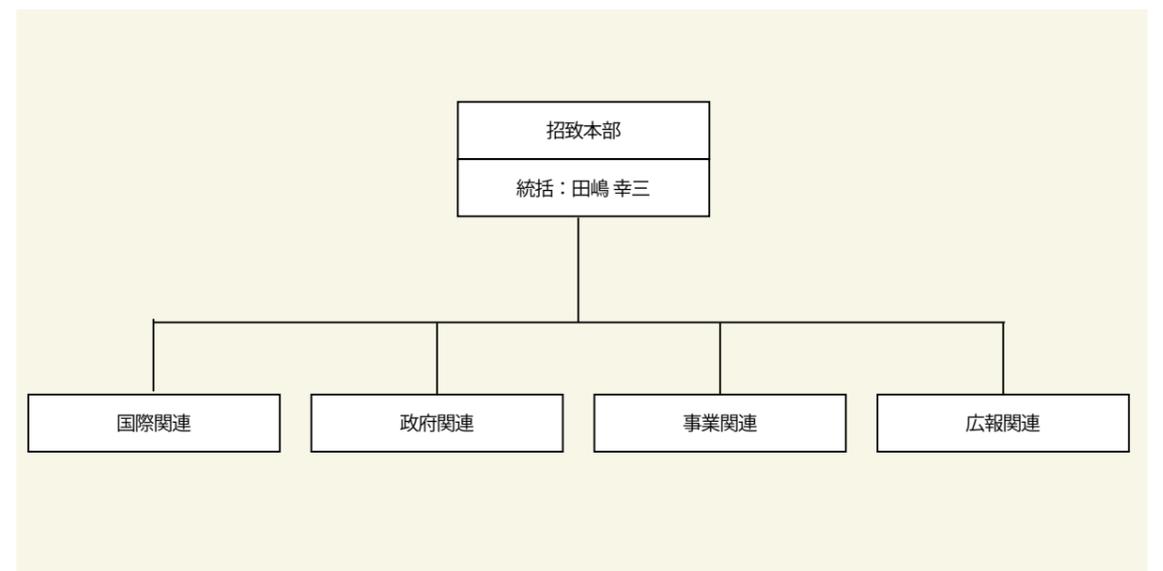
2009年3月12日、JFA理事会は、2018/2022年FIFAワールドカップ™及び2017/2021年FIFAコンフェデレーションズカップの日本招致を正式に表明する、「招致登録書」をFIFAに提出することを決定した。これにより、名実ともにFIFAワールドカップ™の日本招致の活動がスタートすることとなった。

併せて、同理事会では、2007年12月に設置したFIFAワールドカップ招致検討委員会の管轄のもと、実際の招致活動業務を実施する組織として、新たにFIFAワールドカップ招致本部（統括：田嶋幸三 JFA専務理事）を設置することを決定した。

2009年4月1日、FIFAワールドカップ招致本部は、JFAスタッフを中心に8名でスタートした。

FIFAワールドカップ招致本部は、以降、2009年9月の2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会の設立に伴う、日本招致委員会実行本部への組織改編を経て、一貫してFIFAワールドカップ™日本招致の実行部隊として機能した。

FIFAワールドカップ招致本部組織構成（2009年4月現在）



## 2.2 招致に向けての準備・プランニング

新たに設置された FIFA ワールドカップ招致本部の喫緊の業務は、大会理念・コンセプトの構築、日本招致委員会の設立準備、「招致契約書類」等の精査及び対応等、今後の招致活動を展開していくための基盤整備であった。

大会理念・コンセプトの構築では、“なぜ、日本は FIFA ワールドカップ™を招致するのか”

“日本はどのような FIFA ワールドカップ™を開催するのか”

“日本は FIFA ワールドカップ™の開催を通じてどのように世界に貢献するのか”

などといった、FIFAをはじめ国内外から問いかけるであろうこれらのテーマに対し、明確な、そして力強いJFA及び日本の意志を表明する回答を用意することが、最大のミッションであった。

世界のサッカー界の共感が得られる日本オリジナルの提案を行うべく、招致検討委員会での議論をはじめ、各界各層の人々へのヒアリング、JFA 幹部へのブリーフィング、そして招致本部内での会議が連日のように行われた。

※大会構想の詳細については第1部第6章(P56)を参照。

FIFA ワールドカップ™日本招致委員会の設立は、責任ある法人格のもとに招致活動を積極的に展開するためにも、早急に準備を進める必要があった。また、FIFAの招致プロセス(p.15参照)には、2009年9月18日の招致委員会設立期限が定められていたことから、招致本部のスタッフは組織の立ち上げ早々から、その準備に奔走した。

さらに、FIFAの招致プロセスには、そのほかにも様々な事項についてスケジュールが定められていたため、国際関連、政府関連、事業関連、広報関連の各業務を同時に進行させる必要があった。

### 2.2.1 国際関連業務

国際関連業務の主要テーマは、FIFA事務局との連絡・調整、FIFA理事及びFIFA事務局スタッフとの関係構築、さらには、各招致国の動向調査・情報収集等であった。

これらの業務を実施するため、以下のイベントに参加した。

- ・第59回FIFA総会(バハマ/ナッソー)への出席による各招致国の情報収集  
(2009年5月28日～2009年6月5日)

- ・2009年FIFAコンフェデレーションズカップ南アフリカ大会、2018/2022年FIFAワールドカップ™招致国のためのオブザーバーズ・プログラムへの参加  
(2009年6月20日～2009年6月21日)

\*オブザーバーズ・プログラムは、2018/2022年FIFAワールドカップ™の各招致国を対象にFIFAが実施したもので、FIFAコンフェデレーションズカップの視察及び研修を通じて、FIFA主催大会の概要及び運営についての全般的な理解を得る機会を提供するものである。

- ・FIFAワールドカップ招致国対象ワークショップ(スイス/チューリヒ)への参加  
(2009年7月8日～2009年7月10日)

\*ワークショップはFIFAが実施し、2018/2022年FIFAワールドカップ™の各招致国を対象に、招致プロセスや招致契約及び開催契約に定められる事項を各領域ごとに解説するものである。

- ・FIFAワールドカップ招致国対象個別ワークショップ(スイス/チューリヒ)への参加  
(2009年8月24日～2009年8月26日)

\*招致国対象個別ワークショップは、FIFAが2018/2022年FIFAワールドカップ™の各招致国を対象に個別に実施するもので、招致プロセスや招致契約及び開催契約に定められる事項について、各招致国の実務担当者に対し各領域ごとに解説するものである。

FIFA コンフェデレーションズカップ オブザーバーズ・プログラムスケジュール

日	時間	プログラム内容
6月20日	11:00	サントン・サン・ホテル(ヨハネスブルグ)のロビーで参加者によるミーティング FIFA ワールドカップ本部へ。許可証の発行
	12:00	FIFA ワールドカップ本部で参加者歓迎会、挨拶
	13:30	レコトゥラ・レストラン(ネルソン・マンデラ広場)にて昼食
	14:30	FIFA コンフェデレーションズカップ 2009 と 2010 FIFA ワールドカップ™の準備に関する説明
	15:30	FIFA ワールドカップ本部から、ロータス・ヴァースフェルド・スタジアム(ツワネ)へ移動
	17:30	ロフタス・ヴァースフェルド・スタジアム訪問
	20:30	イタリア対ブラジル戦視察
	22:45	サントン・サン・ホテル着
6月21日	09:00	サントン・サン・ホテル(ヨハネスブルグ)ロビーにてミーティング
	10:00	2010年FIFAワールドカップ™開幕戦及び決勝戦スタジアム(サッカーシティ)見学
	12:30	ザ・ブッチャー・ショップ(ネルソン・マンデラ広場)にて昼食
	14:30	FIFA ワールドカップ本部で概要ミーティング

FIFA ワールドカップ招致国対象ワークショップスケジュール

日	時間	プログラム内容
7月9日	09:00-09:15	挨拶
	09:15-09:45	一般事項、招致手順、時系列、プロジェクトマネジメント、コミュニケーション総則
	09:45-10:45	法律問題、政府保証
	10:45-11:00	休憩
	11:00-12:00	スタジアムのインフラ、チーム及び抽選会について
	12:00-12:45	宿泊設備、空港、交通輸送
	12:45-13:30	昼食
	13:30-14:30	財政、保険
	14:30-15:30	CSR、遺産、環境
	15:30-15:45	休憩
	15:45-16:15	マーケティング、イベントプロモーション、開催都市
	16:15-16:45	チケットティングとホスピタリティ
	16:45-17:00	休憩
	17:00-17:45	メディア
	17:45-18:15	IT・コミュニケーションテクノロジー
	18:15-19:00	TV・TVコミュニケーションテクノロジー
	19:00-19:30	その他諸事項、質疑応答

FIFA ワールドカップ招致国対象個別ワークショップスケジュール

日	時間	プログラム内容
8月24日	11:00-11:45	ファイナンス(予算計画、収益配分、チケット価格、LOC設立、寄付、ファンフェスト)
	12:00-12:45	リーガル(招致委員会設立、政府保証、招致マーク、招致スポンサー活動)
	14:00-14:45	TV一般(照明、インフラ、パブリックビューイング、インフォテイメント)
	15:00-15:45	ジェネラル(招致関連スケジュール、招致ブック、その他)
8月25日	11:00-11:45	マーケティング(招致マーク、招致プロモーション、寄付、マーチャンダイジング、ファンフェスト)
	12:00-12:45	CSR(サッカーの発展、持続可能な人と社会の発展への貢献、環境保護(グリーンゴール))
	14:00-14:45	IT(FIFA IT リクワイアメントブック)
8月26日	15:00-15:45	メディア・コミュニケーション(メディアプロモーションイベントに関するガイドライン、ドローにおけるプロモーション、FIFA 冊子/FIFA.comにおけるプロモーション)
		Welcome/Introduction
		インフラ一般&イベントインフラ&アコモデーション
		競技関連インフラ
		アコモデーション
		スタジアムスペース必要条件
		イベントマネージメント&競技
		マーケティング
		メディア
		TV
		ホスピタリティ/プロトコール
		チケットティング
		MATCH IT
		安全&セキュリティ
	その他の考慮事項/スタジアムモニター	

・ブラッター FIFA 会長表敬訪問及びブラッター FIFA 会長旭日大綬章勲章伝達式・叙勲祝賀レセプションへの参加  
(2009年9月7日～2009年9月8日)

FIFA ブラッター会長の旭日大綬章に対する勲章伝達式・叙勲祝賀レセプションが9月8日、スイスのベルンにある在スイス日本大使公邸で行われた。

最初に、式典を執り行った在スイス日本国大使館の小松一郎特命全権大使が挨拶し、2002年のFIFAワールドカップを振り返りながら、ブラッター会長に対して祝辞を述べた。ブラッター会長は挨拶で日本サッカーの歴史と発展について触れ、今回の受章がFIFAと日本の密接な関係やサッカーが持つ普遍的な価値に裏打ちされていると、その喜びを語った。

このレセプションには、欧州サッカー連盟のブラティニ会長をはじめ、サッカー界、スポーツ界の著名人が大勢参列。JFAからは犬飼会長と岡野最高顧問が出席し、集まった人々とブラッター会長の受章を喜び合った。



旭日大綬章を受章したブラッター FIFA 会長（左）を表敬訪問した犬飼委員長/JFA 会長（右）（スイス・チューリヒの FIFA 本部にて2009年9月7日）

## 2.2.2 政府関連業務

政府関連業務の主要テーマは、FIFA ワールドカップ™日本招致にかかる閣議了解、及び政府保証の取

得に向けた、政府・関係省庁との協力体制の構築である。また、開催地自治体、チームベースキャンプ自治体の募集にかかる調査・準備についても、早急に進める必要があった。

2009年7月25日には、都道府県サッカー協会を集めた「全国専務理事会議」にて、「2018/2022年FIFA ワールドカップ™日本国内での招致関連手続きの説明及び誘致の関心表明」を発信した。

この「誘致の関心表明」は、日本招致委員会の正式な設立の前に、都道府県協会及び関連自治体に対し、FIFA ワールドカップ™招致についての情報提供を主目的に行った。この時点においては招致委員会が設立されていなかったため、スタジアム/開催都市・チームベースキャンプの立候補については、まず都道府県協会が「誘致の関心表明」を行い、招致委員会設立後に各自治体による正式な立候補を受け付けることとした。

## 2.2.3 事業関連業務

事業関連業務の主要テーマは、招致協賛パートナーの募集準備であった。この業務は、FIFA ワールドカップ™日本招致への財界を中心とする広範な支持を獲得するという側面と、招致活動の資金を確保するという2つの側面を併せ持っていた。折からの世界的な経済不況の中、いかに企業の理解と賛同を得るかに担当スタッフは頭を悩ませつつも、戦略の立案に当たった。

## 2.2.4 広報関連業務

広報関連業務の主要テーマは、FIFA ワールドカップ™日本招致の海外及び国内広報戦略の立案であった。業務の実施に関しては、限られた予算の中でいかに効率的に支持と共感を得ることができるかという部分に腐心した。具体的には、招致マークの開発、Web サイトの構築、コミュニケーションツールの開発、イベント企画など、本格的な招致活動を展開するに際しての準備作業に当たった。

# 第3章 日本招致委員会の設立

## 3.1 2018/2022年FIFA ワールドカップ™日本招致委員会の設立

### 3.1.1 招致委員会設立の経緯

招致委員会の設置については、FIFA の招致プロセスにより、2009年9月18日までの設立が求められていた。また、その組織形態については、協会内部に招致委員会組織を置くか、もしくは別法人として組織を設置する、という2つのオプションが用意されていた。

招致委員会設立に向けての協議に際しては、

- ①招致委員会の活動期間は、招致の結果に関わらず2010年12月までと短く、時限的な組織であること
- ②活動期間は短い、活動内容は広報PR、渉外活動、招致運営、企画調査と広範にわたり、短期間に集中的に実施しなければならないこと
- ③FIFA の定めた設立期限までに、定款をはじめ全ての必要書類を調え提出する必要があるなど、時間的制約があること

など、様々な要件が考慮された。

組織形態については、JFA 内部に組織を置く案を含め、公益財団（社団）法人、一般財団（社団）法人、NPO 法人、株式会社など、それぞれの形態について検討が行われた。その結果、招致委員会の活動の性格、あるいは財務の透明性を担保するため、最終的にはJFA とは別法人となる、一般財団法人を設立することとした。

### 3.1.2 「一般財団法人 2018/2022年FIFA ワールドカップ™日本招致委員会」の設立

2009年9月10日、JFA 理事会において「一般財団法人 2018/2022年FIFA ワールドカップ™日本招致委員会」の設立が承認された。委員長には、犬飼基昭 JFA 会長が就任することとした。

理事会では、同法人の設立をもって「2018/2022年FIFA ワールドカップ™日本招致委員会」を組織し、招致活動への推進体制を確立すること、今後、サッカー界のみならず、多方面から委員を選定していくことが確認された。

また、上記法人の設立に伴い招致活動を支援するため、招致委員会に対してJFA より最大5億円の補助金拠出が決定された。

翌9月11日には、「一般財団法人 2018/2022年FIFA ワールドカップ™日本招致委員会」の法人登記を完了した。このことにより、対外的にも正式に2018/2022年FIFA ワールドカップ™日本招致の活動がスタートした。

※「2018/2022年FIFA ワールドカップ™日本招致委員会」の定款については、資料集6. を参照。

3.1.3 招致委員会の組織体制

一般財団法人 2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会には、会議体としての 2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会が設けられ、委員にはサッカー界を中心に、スポーツ界、政財界、行政、自治体、学术界などからメンバーを募り、日本の総力を結集した体制とした。

一般財団法人 2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会には、理事会のもとに招致活動の実務を行う実行本部を設置するとともに、2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™招致連絡協議会、ヒューマニティ & テクノロジー部会、招致アンバサダーの3つの支援カテゴリーを設置した

2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™招致連絡協議会には、各団体の役員、及び 2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™の開催候補自治体の首長に就任いただき、招致活動全般における支援を要請することとした。

ヒューマニティ & テクノロジー部会は、大会理念・コンセプト及び大会構想の策定など、2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™のグランドビジョン構築に際し、専門的見地から支援いただくこととした。部会長には、「日本のインターネットの父」とも称される、村井純 慶應義塾大学 環境情報学部長・教授に就任いただいた。

招致アンバサダーは、日本の招致活動の「顔」として、2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本開催の意義を国内外に積極的にアピールする役割を担っており、FIFA や各大陸連盟、海外メディアに対して情報発信を行うとともに、日本国内の人々の理解と共感を促進していく重要な存在である。アンバサダーには、日本代表監督経験者、Jリーガーをはじめ日本のサッカー関係者に、順次就任いただくこととした。

※ 2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会関係名簿については、資料集 5. を参照。

3.1.4 招致委員会実行本部の発足

2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会の設立に伴い、JFA 内の組織であった FIFA ワールドカップ招致本部を発展的に解消し、新たに日本招致委員会実行本部（本部長：田嶋幸三 JFA 専務理事）を発足させた。

それまでの国際関連、政府関連、事業関連、広報関連の4業務部門に加え、新たにコミュニケーション部門、宿泊／輸送部門を設置した。

コミュニケーション部門は、大会構想の検討・構築を行うほか、招致活動全般の計画を立案・実施するなど、実行本部の各種活動の司令塔的役割を果たす部門である。コミュニケーション部門の中には、招致プロモーション計画の立案及び実施を行うプロモーションチーム、FIFA に提出する「招致ブック」の編集制作を行う招致ブック制作チーム、広報及び報道対応を実施する広報担当チームが置かれた。

宿泊／輸送部門は、FIFA から要求されている「ホテル契約書」に基づく各ホテルの調査及び契約業務のほか、招致活動の実施に伴い発生する宿泊・輸送の手配業務を実施する。

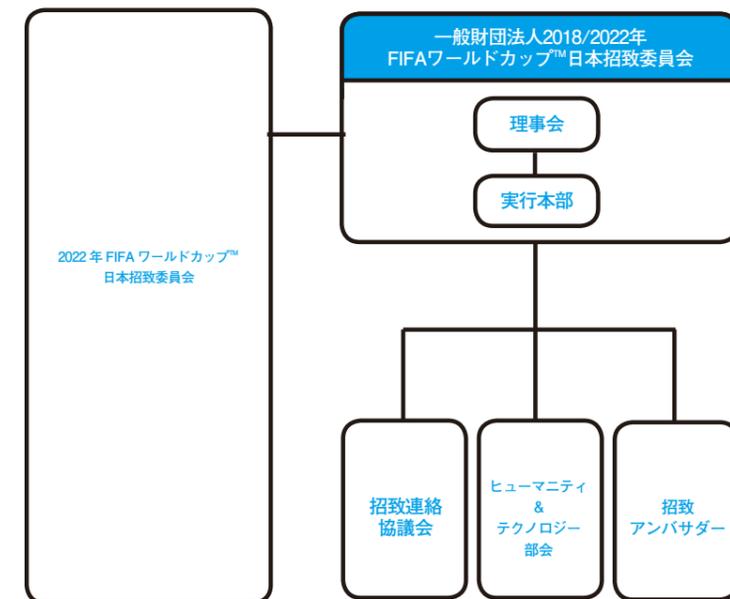
また、政府関連業務については、開催地自治体・チームベースキャンプ自治体の募集活動等の実施に伴い、自治体対応業務が拡大することから、政府／自治体部門に改称した。

※ 2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会実行本部組織図については、資料集 4. 2 を参照。

2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会概要

● 一般名称	2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会
● 法人名称	一般財団法人 2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会
● 英文名称	Japan 2018/2022 Bid Committee
● 設立日	2009 年 9 月 11 日
● 所在地	東京都文京区サッカー通り（本郷 3 丁目 10 番 15 号）JFA ハウス 10 階
● URL	http : / / www.dream2018-2022.jp

2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会組織図



\* 2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会は、2010 年 5 月 11 日、招致対象を 2022 年 FIFA ワールドカップ™に一本化したことに伴い名称変更した。

### 3.2 日本招致委員会設立記者発表

2009年10月8日、新たに設立された2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会は、東京・JFAハウスにおいて招致委員会設立についての記者発表を行った。委員長に就任した犬飼 JFA 会長をはじめ、同招致委員会のメンバーである小倉 FIFA 理事 /JFA 副会長、田嶋 JFA 専務理事が出席し、日本招致委員会の設立を発表した。

同記者発表では、2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致の招致マーク、招致プロジェクト名が発表されるとともに、特別広報大使アトムの就任が発表された。



日本招致委員会設立記者発表会場



左から田嶋 JFA 専務理事、小倉 FIFA 理事 /JFA 副会長、特別広報大使アトム、犬飼委員長 /JFA 会長

#### 犬飼基昭委員長コメント（一部抜粋）



日本サッカー協会は「JFA2005年宣言」で2050年までにFIFAワールドカップ™を開催することを“約束”に掲げました。豊かなスポーツ文化を育み、社会の発展に貢献するという理念のもと、私たちはこの立候補を通じ、必ずやワールドカップを日本で開催したい、と考えています。

2002年大会からまだ間もないこと、設備や財政面の課題、東京オリンピック招致の結果など、皆様が懸念されることもあるかとは思いますが、私たちは、強い意志と勇気をもって招致の成功を目指します。2002年大会では、ワールドカップの醍醐味やサッカーの持つパワー、スポーツを通じた国際交流の素晴らしさを多くの国民が実感しました。

サッカーは世界で一番、愛されているスポーツです。国境や人種、言語を超え、子どもたちの夢を育み、世界平和や国際交流を推進する無限の可能性を秘めています。2002年大会の鮮明な記憶を持つ日本だからこそ新しい次元へとワールドカップを進化させることができると確信しています。その想いを込めて、我々は今回の招致活動を「DREAM 2018/2022」と名づけました。日本中、そして世界中の夢を乗せ、日本人の手によってワールドカップの歴史に輝かしい1ページを刻みます。

私も先日、FIFAの本部にてブラッター会長と会談し「日本を応援しているよ、頑張れ！」とのメッセージを受け取りました。日本に対して大きな期待を寄せていることをひしひしと感じました。もっとよりよき世界に、さらなるアジアの発展へ、そして豊かな日本に。日本が行う新しいワールドカップは、環境問題をはじめとするさまざまな人類の課題解決に模範を示していく絶好の機会にもなるはずです。私たちは、もう一度、世界の期待に応えたいと思っています。

ワールドカップ日本開催には、本日お集まりのメディアの皆様をはじめ、政界、財界、行政、開催地やキャンプ地招致に立候補している地域の皆さん、そして、日本中のサッカーファミリーの皆さんの力が必要です。是非とも、皆さんとワールドカップを日本で開催するという「夢」を共有し、実現させましょう。どうか、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

## 小倉純二 FIFA 理事 / JFA 副会長 コメント（一部抜粋）



ワールドカップの注目度は高まっています。そういう意味でも FIFA の要求も厳しくなっています。それをクリアするために、FIFA の評価委員会が 2010 年 7 月もしくは 8 月にインスペクションを実施することが予定され、かなり詳細なレポートを提出することになっています。

オリンピックの場合、IOC 委員は招致立候補国に訪問してはいけなくなっておりますが、同じように FIFA でも理事が招致立候補国の視察をすることは好ましくないという前提で、2010 年のアフリカ大会も決まりました。今回もおそらく同様であると考えられ、できるだけ評価委員会に優劣をつけることを要求することになるかと思えます。

日本にとって大切なのは、どういうコンセプトでワールドカップを開催するのか。特に日本と韓国は前回開催から、いちばん開催間隔が短いので、なぜやるのかという答えを求められるかと思えます。他の招致立候補国もそうですが、これから日本の招致委員会がどのように提案書をまとめるかがカギを握っていることになるでしょう。



開催立候補国の現状について説明する小倉 FIFA 理事 / JFA 副会長

## 田嶋幸三 JFA 専務理事 コメント（一部抜粋）



われわれは今回の招致活動において、「世界最大のコミュニケーションの装置」というワールドカップの果たす大きな役割を、もっともっと発展させてゆきたい、それが出来るのは日本しかない、と世界に対してアピールするつもりです。それは、ワールドカップを通じて世界の対話を促進させ、平和な地球社会を実現する一助となりたい、ということです。

2002 年のワールドカップを通じてわれわれが得た「感動」、そこから生まれる「対話」と「相互理解」という素晴らしい経験を、今度は世界の隅々と分かち合いたいと考えます。開催国という枠を超えて、ワールドカップの「喜び」を世界中と共有するために、いわば「日本は世界中とワールドカップを共催したい」という気持ちで提案をします。

では、そのような大会を可能にする日本の持つポテンシャルはなんなのか。日本は何ができるのか。そのベースになるのは「共感力」に優れた日本人ならではの「人間性」(Humanity)と世界に誇る「技術力」(テクノロジー)だと考えます。

例えば、相手を尊重して思いやる、共感力に優れた“人間性”は、さまざまな技術と産業も発展させてきました。世界最先端の“技術力”も、日本ならではの大きなポテンシャルです。将来の環境問題を解決できるような技術を駆使した素晴らしいワールドカップにしようと思います。こういった日本の力を使って、ワールドカップを通じて、世界が真の意味で「ひとつになる」。ワールドカップを「真にユニバーサル」な次元に進化させる。これがわれわれの招致コンセプトです。

「We make the World Cup Truly Universal.」世界中のあらゆる国々、あらゆる人々と、ワールドカップの喜びと感動を分かち合うことができる、ワールドカップを通じて対話し、相互に理解し、平和な地球社会の到来を実感する、そんなワールドカップを目指します。

では、具体的にどのようなワールドカップ像になるのか。これについてはヒューマンシティの視点から、テクノロジーの視点から、それぞれ有識者の方々にご協力いただきます。招致委員会内に「検討部会」を設置いたしまして、今後更に検討を進めてゆく予定です。「ヒューマンシティ部会」と「テクノロジー部会」が車輪の両輪となって新しいワールドカップ像を構想してまいります。

さて、われわれはこの招致活動を「DREAM2018/2022 プロジェクト」、と名付けております。これはワールドカップ開催を通じてサッカーの可能性を上げ、日本と世界の夢を実現していくという意味を込めてつけました。日本サッカー界の夢として「JFA2005 年宣言」に掲げた夢の実現にもつながるプロジェクトです。

冒頭でもご覧いただいた招致マークについてもご説明いたします。“Truly Universal = ワールドカップの喜びを真に世界中が分かち合う”というコンセプトのもと、日本人のヒューマンシティと先端のテクノロジーによって、ワールドカップとサッカーの可能性を広げようとする意思を込めています。

われわれはこのコンセプトに従って招致活動を進めて参ります。現在われわれは 2009 年 4 月に FIFA から提示された条件を満たすべく、各方面と調整しています。詳細についてはお手元の資料をご覧くださいと思います。開催地自治体/スタジアム、およびチームベースキャンプの募集も開始しておりますし、政府保証の獲得に向けても関係各所に積極的に働きかけています。

サッカーの可能性は、私たちの可能性です。皆様のご支援とご協力のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

## 村井純 ヒューマニティ &amp; テクノロジー部会長 メッセージ



ヒューマニティ&テクノロジー部会長：村井純（慶應義塾大学 環境情報学部長・教授）  
1955年生まれ。1979年慶應義塾大学工学部卒業。1981年大学院工学研究科修士課程修了、1984年博士課程修了。東京大学大型計算機センター助手等を経て、1990年慶應義塾大学環境情報学部助教授。1997年教授。1999年から2005年までSFC研究所所長。専門領域はコンピュータコミュニケーション、オペレーティングシステム。工学博士。

このたび、2018/2022年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会のテクノロジー部会長の部会長を拝命いたしました。慶應義塾大学の村井です。私は2002年のワールドカップの際にもICTの面でお手伝いさせていただきましたが、ワールドカップは真にグローバルなイベントであり、世界中の人類のコミュニケーションを自然に引き起こす特別なイベントです。その意味でも、世界の対話と平和に寄与する招致委員会のお考えに賛同します。日本のコミュニケーション技術を使って、約10年後のワールドカップに最大の貢献ができれば非常に有意義な舞台になると確信しています。

日本のコミュニケーション技術は今まで世界の最先端であると言われ続けてきました。この最先端の技術は、単に高精細画像や高品質通信を目的とするのみでなく、人の情熱や気持ちなど、知性と感性をより正確に伝えるために発展し役立てられようとしています。

コミュニケーション技術の発展はまさに日進月歩です。これからの10年、日本やアジアの技術は本当にこの部分を先導する責任を明確に果たすことになります。そして10年後のワールドカップにおいて、日本の最先端の技術の貢献が輝き、それによりワールドカップを通じた人類の対話と共感が飛躍的に促進されなければいけません。

世界のサッカーファンがそれぞれの心の中で持っている夢を、ワールドカップは一つの舞台で演出します。日本の技術がその誇りをかけて、より大きな夢を全ての人が実現できるよう、この大事業に取り組みたいと考えています。

## ●招致活動プロジェクト名称

FIFAワールドカップの開催を通じてサッカーの可能性を広げ、日本の夢を、世界の夢を実現していくため、そして「JFA2005年宣言」に掲げた夢を実現するため、2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致活動のプロジェクトを、「DREAM2018/2022」と名付けた。

\*2010年5月11日、招致対象を2022年大会に一本化したことに伴い、名称を「DREAM2022」に変更した。

## ●招致ロゴマーク、デザインエレメント

「DREAM2018/2022」招致マークは、FIFAの規定により、デザインエレメントと各国サッカー協会のマークを一体化した形状となっている。

デザインエレメントについては、“ワールドカップの喜びを真に世界中が分かち合う”というコンセプトのもと、日本人のヒューマニティと先端のテクノロジーによって、ワールドカップとサッカーの可能性を広げようとする意思が込められている。また、拡大していくサッカーボールのモチーフには、青い地球のイメージが重ねて表現されている。

## ■プロジェクトロゴ（フルカラー）

DREAM●2022

DREAM●2022

## ■招致ロゴ（フルカラー）



## ■コンセプトマーク（フルカラー）



## ●特別広報大使アトム

手塚治虫氏が生み出した「アトム」が、2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会の広報大使に就任しました。アトムは、2010年12月2日の開催国決定に向けて、日本の招致活動の様々な情報を日本、そして世界のみなさんにお伝えし、理解と応援の輪を大きくしていきます。

今回、アトムが特別広報大使に就任したのは、アトムに託されたメッセージと、FIFAワールドカップの日本招致活動の理念とが、強く響きあったからです。

私たちは、もっと国を越え、スタジアムの感動と興奮が、世界の隅々にまでいきわたるワールドカップを作りたいと考えています。そして、全人類が感動を共有し、地球規模での相互理解と友情の広がり、真に平和な地球社会が訪れることを信じます。

ロボットと人間との関係を通じて、人と人とのふれあいによって育まれる愛、愛から生み出される勇氣、人を想う気持ちがあってこそ真の科学の進歩があること、そして相手への無理解や差別を廃し、違いを認め合うことによって実現する調和など、アトムはこれから人類が本当に必要となる大切なことを伝えてくれます。

私たちと同じ想いを持つ特別広報大使アトムは、私たちの招致活動に大きな力となってくれるものと考えます。



© 2009 Imagi Crystal Limited / Original Manga © Tezuka Productions Co., Ltd.

\* 「2022年FIFAワールドカップ™日本招致活動のご紹介」より引用

## ●新聞広告の掲載

2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会の設立発表を行った翌日、2009年10月9日の朝日新聞全国版朝刊に全面広告を掲載した。前日行われた記者発表を皮切りに、2018年、2022年FIFAワールドカップ™招致に向けて、本格的に日本の招致活動がはじまったことを告げている。

サッカーの可能性は、私たちの可能性だ。

8年前の2002年FIFAワールドカップ。世界は驚いたそうです。こんなにも暖かく、ゲストをもてなす国があったのかと。こんなにも熱く、ライバルへ拍手を送る国があったのかと。2018年、または2022年大会に向けて、私たちはワールドカップの開催国に立候補します。世界の期待に、もう一度応えようと思います。日本のコミュニケーション技術が広げる、サッカーによる対話。誰よりも平和を信じる気持ちから生まれる、国境も言語も越えた大切なもの。最大のスポーツイベントが、私たちの手で進化する。最高の興奮と感動を、私たちの手で世界へ届ける。大きな夢に向かって、皆さんとともに歩いて行けたら、と思います。

**DREAM 2018|2022**

BIDDING NATION JAPAN

私たちはFIFAワールドカップの開催国に立候補します。

2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会  
www.dream2018-2022.jp

日本の力で未来の夢へ！ 特別広報大使にアトムが就任。

2009年10月9日付け朝日新聞全国版朝刊広告

## 第4章 開催候補都市の募集と閣議了解

### 4.1 開催候補都市の募集

#### 4.1.1 「開催地自治体」・「チームベースキャンプ」の正式募集

2018/2022年 FIFA ワールドカップ™日本組織委員会が正式に設立されたことに伴い、2018/2022年 FIFA ワールドカップ™招致「開催地自治体」・「チームベースキャンプ」の正式募集を開始した。

「開催地自治体」・「チームベースキャンプ」の募集については、既に、2009年7月25日、各都道府県サッカー協会に対し「2018/2022年 FIFA ワールドカップ™日本国内での招致関連手続きの説明及び誘致の関心表明」の文書を発信、開催地及びチームベースキャンプの誘致への、都道府県サッカー協会レベルでの関心表明を募ってきた経緯がある。

これに対し、今回は立候補の主体である各自治体を対象にした正式募集である。

9月15日には、各自治体に「2018/2022年 FIFA ワールドカップ™ 招致「開催地自治体」・「チームベースキャンプ」の正式募集 全体説明資料」が送付され、9月25日及び同27日には、立候補に関心を示す自治体及び都道府県協会を対象に説明会を開催した。

説明会では、

- ①主要な招致スケジュール
- ②正式立候補の枠組み
- ③ FIFA への提出書類リスト
- ④ FIFA 規定の主要施設要件
- ⑤正式立候補の手続
- ⑥招致登録金

⑦「招致ブック」に掲載する情報等についての説明がなされた。

正式な立候補の証となる「立候補 正式申請書」の提出期日は、「開催地自治体」、「チームベースキャンプ」ともに、2010年1月8日と設定された。また、FIFAに提出する「開催都市契約書」、「スタジアム契約書」、「トレーニングサイト契約書」、「ホテル契約書」の招致委員会への提出期日は2010年2月26日と設定された。

正式立候補の枠組み（「開催地自治体」・「チームベースキャンプ」）

正式立候補は、原則として「開催地自治体」と「チームベースキャンプ」の2通りに分かれ、下記の要素により構成されます。



今回の招致活動では、立候補国として以下の数を FIFA に提案することが求められています。

スタジアム・・・最低12・最大18(招致契約書第6章参照)

チームベースキャンプ・・・最低64(招致契約書第8章参照)

それぞれが、立候補にあたり確保する必要のある施設(最低数)は、以下の通りです

施設	開催地自治体	チームベースキャンプ
スタジアム	1	---
トレーニングサイト	4	1
ホテル	チーム用=2 FIFA用=1	チーム用=1

提出書類	開催地自治体	チームベースキャンプ
招致委員会宛て書類		
立候補意向表明書	○	×
立候補正式申請書	○	○
FIFA 所定契約書		
開催都市契約書	○	×
スタジアム契約書	○ *1つの開催地自治体内に複数のスタジアムがある場合、スタジアムごとに署名	×
トレーニングサイト契約書	○ *トレーニングサイトごとに署名	○
ホテル契約書	○ *トレーニングサイトごとに署名	○

4.1.2 自治体による正式申請書の提出

2010年1月8日、2018/2022年 FIFAワールドカップ™ 招致「開催地自治体」、「チームベースキャンプ」の正式申請書の提出が締め切られた。その結果、「開催地自治体」については12自治体(13スタジアム)、「チームベースキャンプ」については64件の申請が受理された。

これにより、FIFAが規定するスタジアム数12、チームベースキャンプ数64の最低基準を満たすこととなった。

なお、スタジアム及びチームベースキャンプの最終決定・承認は、スタジアムについては2018年大会が2013年に、2022年大会が2015年、チームベースキャンプについては2018年大会が2015年、2022年大会が2019年に FIFA により行われることとされている。

2010年1月14日時点での正式申請書を提出した「開催地自治体」、「チームベースキャンプ」は以下の通り。

申請「開催地自治体・スタジアム」(13件) \* 2010年1月14日時点

自治体名	スタジアム名
札幌市(北海道)	札幌ドーム
茨城県	茨城県立カシマサッカースタジアム
埼玉県	埼玉スタジアム2002
東京都	味の素スタジアム 国立競技場
横浜市(神奈川県)	日産スタジアム
新潟県	東北電力ビッグスワンスタジアム
静岡県	エコパスタジアム
豊田市(愛知県)	豊田スタジアム
大阪市(大阪府)	大阪市長居陸上競技場(※)
吹田市(大阪府)	(仮称)吹田スタジアム
神戸市(兵庫県)	ユニバー記念競技場もしくはホームズスタジアム神戸
大分県	九州石油ドーム

※大阪市長居陸上競技場は、検討中の新スタジアムに今後変更の可能性あり

※( )内は自治体の所在都道府県

※スタジアム名称は当時

申請「チームベースキャンプ」(64件) \* 2010年1月14日時点

自治体名	トレーニングサイト名
網走市(北海道)	網走スポーツ・トレーニングフィールド
札幌市(北海道)	札幌サッカーアミューズメントパーク
七飯町(北海道)	東大沼多目的グラウンド(トルナーレ)
室蘭市(北海道)	入江運動公園陸上競技場
遠野市(岩手県)	遠野運動公園陸上競技場
花巻市(岩手県)	花巻市スポーツキャンプむら
仙台市(宮城県)	仙台スタジアム(ユアテックスタジアム仙台)
秋田市(秋田県)	秋田市八橋運動公園球技場
にかほ市(秋田県)	仁賀保グリーンフィールド
山形県/天童市	山形県総合運動公園
福島県/楡葉町/広野町	Jヴィレッジ
小美玉市(茨城県)	(仮称)小美玉スポーツシュレ公園
鹿嶋市(茨城県)	鹿嶋市高松緑地公園多目的球技場
神栖市(茨城県)	神栖市若松運動場
つくば市(茨城県)	フットボールスタジアムつくば
ひたちなか市(茨城県)	ひたちなか市総合運動公園陸上競技場
水戸市(茨城県)	ケースデンキスタジアム水戸/水戸市立サッカー・ラグビー場
習志野市(千葉県)	習志野秋津サッカー場
成田市(千葉県)	サウンドハウス・スポーツセンター内 プレイテック・スタジアム
川崎市(神奈川県)	川崎市等々力陸上競技場
相模原市(神奈川県)	相模原麻溝公園競技場
長野市(長野県)	南長野運動公園総合運動場 総合球技場
松本市(長野県)	松本平広域公園総合球技場(アルウィン)

糸魚川市（新潟県）	美山陸上競技場
十日町市（新潟県）	当間多目的グラウンド
長岡市（新潟県）	長岡ニュータウン運動公園
金沢市（石川県）	金沢市民サッカー場
御殿場市（静岡県）	御殿場市陸上競技場
静岡市（静岡県）	清水ナショナルトレーニングセンター
沼津市（静岡県）	静岡県愛鷹広域公園 多目的競技場
藤枝市（静岡県）	藤枝総合運動公園サッカー場
豊田市（愛知県）	豊田スタジアム
伊勢市（三重県）	伊勢市朝熊山麓公園フットボール場
飛騨市（岐阜県）	飛騨市古川ふれあい広場
大津市（滋賀県）	皇子山陸上競技場
長浜市（滋賀県）	神照運動公園（長浜市多目的競技場）
守山市（滋賀県）	野洲川歴史公園サッカー場
堺市（大阪府）	堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター
高槻市（大阪府）	高槻市立萩谷総合公園サッカー場 / 高槻市立総合スポーツセンター
神戸市（兵庫県）	ホームズスタジアム神戸
奈良県	奈良県立橿原公園陸上競技場
和歌山県	紀三井寺公園陸上競技場
出雲市（島根県）	出雲健康公園
益田市（島根県）	島根県立サッカー場
広島市（広島県）	広島広域公園陸上競技場
香川県	香川県立丸亀競技場
徳島県	鳴門・大塚スポーツパーク ポカリスエットスタジアム
今治市（愛媛県）	桜井海浜ふれあい広場 / 上浦多々羅スポーツ公園
西条市（愛媛県）	ひうち陸上競技場 / 東予運動公園球技場
新居浜市（愛媛県）	新居浜市営サッカー場（グリーンフィールド新居浜）
松山市（愛媛県）	ニンジニアスタジアム
高知県	高知県立春野総合運動公園
北九州市（福岡県）	新設予定のスタジアム
福岡市（福岡県）	博多の森球技場（レベルファイブスタジアム）
島原市（長崎県）	島原市営陸上競技場 / 島原市営平成町多目的広場
長崎市	長崎県立総合運動公園新陸上競技場（仮称）
長崎市（長崎県）	長崎市総合運動公園かきどまり陸上競技場
熊本県 / 熊本市	熊本県民総合運動公園陸上競技場
佐伯市（大分県）	佐伯市総合運動公園
日田市（大分県）	鯛生スポーツセンター
豊後大野市（大分県）	サンスポーツランドみえ / 豊後大野市三重総合グラウンド
別府市（大分県）	実相市サッカー競技場 / 野口原総合運動場
指宿市（鹿児島県）	指宿いわさきホテル サッカー場
霧島市（鹿児島県）	霧島市国分運動公園（陸上競技場・多目的グラウンド）

※（ ）内は自治体の所在都道府県

※スタジアム名称は当時

※「/」による併記は連名による立候補の意

## 4.2 閣議了解

2009年12月8日、総理大臣官邸で行われた定例閣議において、「2018/2022年FIFAワールドカップ™」の日本への招致について、閣議了解が得られた。

閣議了解については、FIFAとの招致契約書類に規定されている「政府保証」等の政府による支援

を得るため、2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会が、かねてより政府側に協力を要請していたものである。

閣議了解により、2018/2022年FIFAワールドカップ™の招致活動が、政府により正式に承認されたこととなる。また、政府の支援を条件とする「招致契約書」を整えることが可能となった。

### 閣議了解文書

2018年（平成30年）及び2022年（平成34年）  
ワールドカップサッカー大会の日本招致について

（平成21年12月8日 閣議了解）

ワールドカップサッカー大会の開催は、国際親善、スポーツの振興等に大きな意義を有するものであり、また、2018年（平成30年）及び2022年（平成34年）ワールドカップサッカー大会要求事項中の政府の保証については、現行国内法の範囲内での対応により円滑な開催を図ることができると認められるので、2018年（平成30年）及び2022年（平成34年）ワールドカップサッカー大会を財団法人日本サッカー協会が招請することを了解する。

なお、政府としては、現在、国・地方ともに財政改革の推進が引き続き緊要な課題であることにかんがみ、別紙に掲げる方針により対処するものとする。

### 別紙

- 大会の開催に係る施設の整備その他の公共事業については、その必要性等について十分な検討を行い、通常の公共事業費の中での優先的配分により対処することとし、新たに国による特別の財政措置は講じないこと。
- 大会運営費は、適正な入場料の設定等の事業収入により賄われるものとする。

## 閣議了解に伴う犬飼委員長コメント

昨日、各省庁の副大臣と政務官による第1回会議が行われ、その冒頭で話をする機会をいただいた。その席で、“ワールドカップは世界のビッグイベントという認識をしているので政府としてもサポートを考えている”という主旨の発言もいただき、今日の閣議了解を得られるという感触を持つことができた。

本日、閣議了解を得られて良かった。これで正式に招致活動をスタートでき、自治体に対しても具体的な働きかけができる。

12月4日にケープタウン（南アフリカ）で行われた抽選会で招致を立候補している国のブースが出されていたが、ここでワールドカップが世界最大のイベントであることを改めて実感した。ぜひとも日本に持ってきたい。これから勝負だ。

## 4.2.1 関係副大臣・政務官会議の開催

閣議了解前日の12月7日には、総理大臣官邸において、第1回2018年及び2022年ワールドカップサッカー大会の日本招致に関する関係副大臣・政務官会議が開催された。

関係副大臣・政務官会議は、FIFAワールドカップの開催に関係する内閣官房、文部科学省、内閣府、総務省、法務省、外務省、財務省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、環境省、防衛省、警察庁の13の省庁の副大臣及び政務官により構成されている。第1回会合には、招致委員会から犬飼委員長、田嶋本部長が出席した。

会議では、犬飼委員長、田嶋本部長より大会概要、今後のスケジュールの説明が行われ、閣議了解（案）・政府保証についての意見交換が行われた。

こうした政府との密接な連携・協力のもと、閣議了解にいたる基盤が整った。

※2018年（平成30年）及び2022年（平成34年）ワールドカップサッカー大会日本招致に関する関係副大臣・政務官会議 担当副大臣・政務官一覧については、第2部第4章（p.172）を参照。



関係副大臣・政務官会議に臨む犬飼委員長（中央左）と田嶋本部長（中央右）

## 4.2.2 「招致契約書」の提出

2009年12月8日に閣議了解が得られたことを受けて、2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会は、FIFAにより同年12月11日に設定された「招致契約書」提出期限に合わせ、同12月9日付けにて、FIFAに対し「招致契約書」を提出した。

この「招致契約書」は、2010年5月14日までに「招致ブック」や各種書類（「政府保証」、「開催契約書」、「開催都市契約書」、「スタジアム契約書」、「トレーニングサイト契約書」等）をFIFAに提出することについて基本合意するものであり、FIFAが定める招致プロセスにおいて重要な手続である。

## 4.3 招致PRイベント“メディア・エキスポ”への出展

「招致契約書」をFIFAに提出する5日前の2009年12月4日、2010年FIFAワールドカップ™南アフリカ大会のファイナルドロー（組み合わせ抽選会）が、南アフリカ・ケープタウンで行われた。FIFAワールドカップ™ファイナルドローには、開催国決定の投票権を持つFIFA理事をはじめ、出場各国のサッカー協会関係者、世界中の報道関係者が一堂に会する。

2010年FIFAワールドカップ™南アフリカ大会の組み合わせ抽選会をフィナーレに、FIFAは様々なイベントや会議プログラムを用意しており、2018/2022年FIFAワールドカップ™招致に関する報道向けPRイベント「招致国メディア・エキスポ（Bidding Country Media Expo）」もその中のひとつであった。

日本をはじめ10グループ・12の招致国（日本、アメリカ、イングランド、インドネシア、オーストラリア、オランダ&ベルギー、カタール、韓国、スペイン&ポルトガル、ロシア）のPRブースが一同に会し、報道関係者約250人、及びFIFAをはじ

めとするサッカー関係者など約150人に向けて、自国への招致をアピールした。

午前10時、イベント会場となったケープタウン市内のテーブルマウンテンに近いエリアにあるリーウヴェンフォフ邸（Leeuwenhof Estate）が開場、報道関係者が一斉に場内に入り、各々PRブースを訪問、個別に各招致国に取材を開始した。その後10招致国・グループのPR映像上映があり、続いてブース前、ミックスゾーンでのインタビュー対応が行われた。

日本のメッセージは、“208 Smiles”～自国のためだけではなく、FIFA加盟国208カ国・地域全ての人々に笑顔をもたらすワールドカップを開催する～というものである。パンフレットや会場で上映した映像でもそれを訴えた。

また、日本の招致ブースデザインは、“208 Smiles”のコンセプトを表現し、世界中のあらゆる国と地域の人々の笑顔をあしらったもので、他の招致国とは趣きの違う独特なものとして評価された。



208の国と地域の人々の笑顔があしらわれた日本のPRブースで、海外の報道記者へアピール

ミックスゾーンでは、犬飼委員長が、主に日本のメディアに対して、「日本は日本の良さを強調して、招致活動を進めています。日本では政権交代もあり、招致活動についてはこれから本格的にスタート。これから帰国して、政府保証の話をしていきます。政府の方々には、前向きにとらえてもらっており、政府内からも招致をしたいという意思もいただいています。政府の方々も、FIFA ワールドカップの価値や招致の意義を理解してもらっています。この件については、12月8日に閣議了解をして頂く予定です。また自治体についても、スタジアムを作ろうという自治体もあり、国内での期待を強く感じています。盛り上がりも感じています。」

と、あらためてこれからの招致活動への意気込みと展望を説明した。

ブース前では田嶋実行本部長が、AP通信、ロイター通信他、外国、日本の報道記者に対応。「2002年にワールドカップを開催した日本が再び立候補するのは早すぎるのではないか?」という質問に対して、

「早すぎるということは全くありません。日本が提案しようとしているのは単なる招致活動ではなく、この先10年間の世界中のサッカーの発展構想についてです。日本のポテンシャルを信頼して欲しいと思います。前回大会の記憶が残っている日本だからこそ、ワールドカップのポテンシャルをもっと拡大させることができると確信しています。」

と、日本の提案方針を説明。また具体的な構想、提案内容に対しての質問には、

「他国との招致レース上、具体的なプランについては現段階ではまだ出せませんが、10年後のワールドカップがどう発展するのか、世界のサッカーがどうなるべきかの構想なので、日本中の叡智を集めて検討しています。他国とは異なる

スタンスに立っていい提案をしたい。」と、日本への今後の期待、注目を高めるべく回答した。

この「招致国メディア・エキスポ」は、2018/2022年 FIFA ワールドカップ™招致のすべての招致国が集まった、初めて開催されるオフィシャルなイベントであった。日本招致委員会は、国内外の多くの報道関係者、サッカー関係者とコミュニケーションを図り、本格的な招致活動のスタートを切った。



日本のPR映像を鑑賞する報道関係者



日本の記者の取材に対応する田嶋実行本部長



日本ブース前で、右から犬飼委員長、ミシェル・ドーグ FIFA 理事、小倉 FIFA 理事 (JFA 副会長)、田嶋実行本部長

## 第5章 2018/2022年 FIFA ワールドカップ™ 日本招致委員会の開催

### 5.1 第1回2018/2022年FIFA ワールドカップ™日本招致委 員会/招致連絡協議会の開催

2010年2月15日、第1回2018/2022年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会を、東京・ホテルオークラ東京において開催した。招致委員会設立後初めて開催された会議には、代理出席を含め37名の委員/会員の出席があった。

冒頭、招致委員会特別顧問の川端達夫文部科学大臣から、

「日本で開催することの意義を世界の人々に伝えるため、知恵と経験を結集するのがこの委員会だと考えています。政府としても昨年12月に閣議了解をしたところです。各界が一丸となり、

ALL JAPAN として進めることが重要です。」との挨拶があった。

その後、小倉副委員長 (FIFA 理事/JFA 副会長) から招致レースの動向について、田嶋実行本部長 (JFA 専務理事) から招致活動戦略、大会構想などについて説明があり、活発な議論が交わされた。

また、会議終了後の記者会見では犬飼委員長が、「日本には、日本だからこそできるワールドカップがあります。FIFA に提出する『招致ブック』には、その構想をしっかり盛り込んでいきます。本日、委員の方々も同じ思いを共有していることがわかり、非常に心強いと思っています。」

と述べ、日本招致への強い意欲を示した。



第1回2018/2022年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会。  
左から川淵三郎顧問 (JFA 名誉会長)、小倉純二副委員長 (FIFA 理事/JFA 副会長) 犬飼基昭委員長 (JFA 会長)、川端達夫特別顧問 (文部科学大臣)、鈴木寛副委員長 (文部科学副大臣)

2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会メンバー（2010年2月12日現在）

役職	氏名	所属/役職
委員長	犬飼 基昭	財団法人日本サッカー協会/会長
特別顧問	麻生 渡	全国知事会/会長
	岡村 正	日本商工会議所/会頭
	金子 万寿夫	全国都道府県議会議長会/会長
	川端 達夫	文部科学大臣
	古賀 伸明	日本労働組合総連合会/会長
	五本 幸正	全国市議会議長会/会長
	桜井 正光	社団法人経済同友会/代表幹事
	竹田 恆和	財団法人日本オリンピック委員会/会長
	野村 弘	全国町村議会議長会/会長
	御手洗 富士夫	社団法人日本経済団体連合会/会長
	森 民夫	全国市長会/会長
	森 喜朗	財団法人日本体育協会/会長
	山本文男	全国町村会/会長
	顧問	岡野 俊一郎
川淵 三郎		財団法人日本サッカー協会/名誉会長
副委員長	小倉 純二	国際サッカー連盟/理事 財団法人日本サッカー協会/副会長
	鬼武 健二	財団法人日本サッカー協会/副会長 社団法人日本プロサッカーリーグ/チェアマン
	鈴木 寛	文部科学副大臣
	大仁 邦彌	財団法人日本サッカー協会/副会長
委員	有馬 利男	富士ゼロックス株式会社/相談役
	内山 齊	社団法人日本新聞協会/会長
	加藤 壹康	キリンホールディングス株式会社/代表取締役社長
	豊田 隆史	文筆家
	畔柳 信雄	株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ/取締役社長
	清水 正孝	東京電力株式会社/取締役社長
	下妻 博	住友金属工業株式会社/代表取締役会長
	高嶋 達佳	株式会社電通/代表取締役社長
	高橋 治之	株式会社電通/顧問
	民秋 史也	株式会社モルテン/代表取締役社長
	中鉢 良治	ソニー株式会社/副会長
	豊田 章男	トヨタ自動車株式会社/代表取締役社長
	広瀬 道貞	社団法人日本民間放送連盟/会長
	細谷 英二	株式会社りそなホールディングス/会長 株式会社りそな銀行/会長
	ポール・ハーディステイ*	アディダスジャパン株式会社/代表取締役
	村井 純	慶應義塾大学/環境情報学部長
	柳井 正	株式会社ファーストリテイリング/代表取締役会長兼社長

※敬称略、役職別に五十音順 ※所属/役職は当時 ※\*印は2010年3月1日付

2018/2022年FIFAワールドカップ™招致連絡協議会会員（2010年2月12日現在）

役職	氏名	所属/役職	
会員	市原 則之	財団法人日本オリンピック委員会/専務理事	
	岡崎 助一	財団法人日本体育協会/専務理事	
	小島 邦夫	社団法人経済同友会/専務理事	
	中川 浩明	全国知事会/事務総長	
	中村 利雄	日本商工会議所/専務理事	
	中村 芳夫	社団法人日本経済団体連合会/事務総長	
	南雲 弘行	日本労働組合総連合会/事務局長	
	芳山 達郎	全国市長会/事務総長	
	各「開催地自治体」の代表者（知事・市長）		

※敬称略、役職別に五十音順 ※所属/役職は当時

## 5.2 第2回2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会の開催

第2回2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会は、「2022年FIFAワールドカップ™招致ブック」のFIFAへの提出を3日後に控えた2010年5月11日、東京・ホテルオークラ東京において開催した。この会議では、「招致ブック」の承認、招致活動の2022年大会への絞込みなど、重要案件が議案に上がっていたことから、代理出席を含め、第1回を上回る47名の委員/会員の出席があった。

冒頭、挨拶にたった犬飼委員長は、「前回の委員会から3ヶ月が経ち、招致活動もいよいよ本格化してきました。5月3日にはFIFAブラッター会長を川端文部科学大臣とともに訪問し、大臣より『政府として全力をつくす』との力強いお言葉をいただきました。FIFAに対し、国を挙げ

て取り組んでいる印象を与えられたと思っています。今日は5月14日の『招致ブック』提出に向けた出陣式と捉えています。」

と述べた。

会議では、5月14日にFIFAに提出する「招致ブック」を一足先に招致委員及び協議会員に紹介、日本独自の大会構想について、「招致ブック」とともにFIFAに提出する「招致映像」を交えながら詳しく説明した。

また、今後、招致活動の対象を2022年大会に絞込むことが報告され、委員会において承認された。

これに伴い、日本招致委員会の名称を「2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会」に変更することとし、招致ロゴマークからも「2018」の文字が消えることとなった。ただし、法人格としての「一般財団法人2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会」については、従前のままとした。



第2回2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会。左から岡野俊一郎顧問（JFA最高顧問）、小倉純二副委員長（FIFA理事/JFA副会長）、犬飼基昭委員長（JFA会長）、川端達夫特別顧問（文部科学大臣）、鈴木寛副委員長（文部科学副大臣）、鬼武健二副委員長（JFA副会長/Jリーグチェアマン）、大仁邦彌副委員長（JFA副会長）、村井純委員（ヒューマンティ&テクノロジー部長）

### 5.2.1 2022年大会招致への絞込み

FIFAワールドカップ™ 2018年大会の立候補を取り下げ、2022年大会への立候補に絞込むことについては、2010年2月頃から折に触れて議論されてきた。

その背景には、2018年大会をヨーロッパ開催にて取りまとめたという、FIFAからの内々の要請を受けたことが挙げられる。同時に、2018年大会に立候補しているヨーロッパ諸国からの支援を獲得するため、2018年立候補辞退を交渉の材料とするとの戦略的な考え方があった。

また、開催国決定の投票方法等が明らかでない現状において、他に先んじて2018年大会の立候補を取り下げ2022年大会に絞込む手続を行うことで、日本の大会招致に向けた強い意志を対外的に強くアピールするとの狙いがあった。

2010年5月3日、FIFAブラッター会長を表敬訪

問した際には、この問題の対応についても協議が行われ、同会長からは日本の決断に賛同と感謝の意が示された。

一方、2018年大会の立候補取り下げについては、2009年12月に政府の閣議了解を得ていることから、政府・関係省庁への事前説明を行うほか、開催地自治体あるいはチームベースキャンプに立候補する自治体及び都道府県サッカー協会に対しても、事前に状況の説明がなされた。

招致委員会実行本部では、今後の招致レースを見据え戦略的に絞込みを決断することとし、対外的な発表のタイミングを計ってきた。そして、第2回2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会において承認されたことで、2022年大会への立候補の絞込みが正式に決定した。

この決定に伴い、組織名（法人名称を除く）及び招致ロゴの変更を行った。

### 5.3 第3回2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会の開催

第3回2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会は、開催国決定のFIFA理事会まで20日あまりとなった、2010年11月10日、東京・ホテルオークラ東京（オーチャードルーム）において開催された。

2010年5月11日の第2回委員会以来、6ヶ月ぶりの開催となった会議には、代理出席を含め39名の委員/会員の出席があった。

冒頭、2010年7月25日にJFA会長に就任したことに伴い、新たに日本招致委員会委員長に就任した、小倉純二委員長が挨拶を行った。

「前回5月11日の第2回招致委員会/招致連絡協議会から約6ヶ月。12月2日の開催国決定に向けて、招致活動もいよいよ最終局面を迎えています。

この間、7月にはFIFAインスペクションが行われ、FIFAの調査団が大阪市をはじめ各開催候補地で日本の開催能力を調査していきました。また、10月28日に行われた理事会では、開催国決定の投票方法も決定いたしました。今後は、最終プレゼンに向けて、日本の提案である次世代ワールドカップの実現を主張してまいりたいと思います。

本日の招致委員会/招致連絡協議会は、2022年FIFAワールドカップ™日本招致のための出陣式として位置付けさせていただきたいと思っております。」

会議では、第2回委員会開催以降の招致活動、及び今後の予定について報告された。

#### 2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会概要

- 一般名称 2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会
- 法人名称 一般財団法人2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会（変更なし）
- 英文名称 Japan 2022 Bid Committee
- 委員会 2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会
- URL <http://www.dream-2022.jp>

### 5.2.2 FIFAブラッター会長表敬訪問

第2回招致委員会/招致連絡協議会の開催に先立つ2010年5月3日、川端達夫文部科学大臣と犬飼基昭委員長が、スイス・チューリヒのFIFA本部に、ブラッター会長を表敬訪問した。

川端大臣より鳩山由紀夫首相の親書がブラッター会長に手渡され、

「日本国政府としては、昨年12月に閣議了解を行っており、私自身も招致委員会の特別顧問に就任して、国を挙げて積極的に支援しているところ

である。

もし我が国で再びワールドカップを開催することができたら、鳩山首相の親書にあるとおり、FIFAの求めに応じて、大会の開催に必要なあらゆる対策を講じる用意がある。」

と、ワールドカップ™日本招致に向けた日本の強い意志を表明した。

会談では、日本の2022年大会への立候補絞込みのほか、今後の招致活動について意見交換が行われた。



第3回2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会

## 【これまでの活動報告】

- ・2022年招致立候補国4カ国の提案の特徴について
- ・ロビー活動について（FIFA ワールドカップ™南アフリカ大会、FIFA U-17 女子ワールドカップ、各大陸連盟総会、FIFA 理事会等）
- ・海外広報活動及び国内広報活動
- ・オフィシャル招致パートナーの状況について
- ・2022年 FIFA ワールドカップ招致推進議員連盟の設立について

## 【今後の活動予定】

- ・FIFA 評価レポートの11月中旬公表について
- ・12月1日の最終プレゼンテーション実施について
- ・12月2日の開催国発表（現地時間16時、日本時間12月3日0時）について

このあとディスカッションに移り、18時15分、招致委員会/招致連絡協議会は閉会となった。

続いて18時45分から、会場を同ホテルのメイプルルームに移し、第3回2022年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会 カクテルパーティが開催された。

パーティでは、日本招致委員会特別顧問の高木義明 文部科学大臣、オフィシャル招致パートナーを代表してキリンホールディングス株式会社執行役員/コーポレートコミュニケーション部長の小川洋氏から挨拶があった。

続いて、日本招致委員会特別顧問であり2022年 FIFA ワールドカップ招致推進議員連盟会長の川端達夫 前文部科学大臣も登壇し、小倉委員長の音頭で乾杯の発声が行われ、祝宴が開始した。



第3回2022年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会/招致連絡協議会カクテルパーティ



乾杯の音頭をとる小倉委員長

## 第6章 「招致ブック」及び「開催契約書」の提出

### 6.1 「招致ブック」及び「開催契約書」の提出

2010年5月14日、スイス・チューリヒのFIFA本部において招致ブック提出セレモニーが行われた。2022年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会は、各招致国とともに同セレモニーに出席し、「招致ブック (Bid Book)」並びに「開催契約書 (Hosting Agreement)」を提出した。

「招致ブック」及び「開催契約書」の提出は、FIFA ワールドカップ™の招致及び開催について、FIFA との契約の成立を意味することから、FIFA の招致プロセスにおいて最も重要な手続として位置付けられていた。

スイス時間午前9時から行われたセレモニーでは、各招致国がアルファベット順に登場。日本は午前11時15分、犬飼委員長がステージに上がり、ブラッター FIFA 会長に「招致ブック」を手渡した。

日本のコンセプトである“208 Smiles” (= FIFA に加盟する世界208の国と地域の人々とワールドカップの感動と喜びを分かち合い、地球上の隅々にいたるまで“笑顔をもたらすワールドカップ”)を、パッケージにも表現した「招致ブック」は、淡々と進行するセレモニーの中であってひととき注目を集めた。

招致ブック提出セレモニーの様子は、日本招致委員会のWebサイト「DREAM2022」を通じて映像配信された。



招致ブック提出セレモニーのステージに立つ、左から田嶋実行本部長、犬飼委員長、ブラッター FIFA 会長

## 6.2 「招致ブック」の仕様及び構成

「招致ブック（Bid Book）」は、「招致契約書」の規定に基づき、「招致ブック本体」と「招致ブック」に添付される「招致ブック情報テンプレート」により構成されている。

「招致ブック本体」は、「招致契約書」に示される20の章からなり、FIFAからの要求事項に対し招致委員会が提案する形式となっている。一方の「招致ブック情報テンプレート」は、「招致ブック本体」の内容に沿ってスタジアム、トレーニングサイト、宿泊施設、輸送インフラなど、各種の詳細なデータを提示することを求めており、あらかじめFIFAにより様式が定められている。

FIFAは、「招致ブック」自体を契約書として位置づけており、「招致ブック本体」に記述した情報、表明、提案された計画・対策のすべてが、法的拘束力を有するとしている。したがって、「招致ブック本体」の全文公開は原則非公開とされた。

また、「招致ブック」と同時にFIFAに提出された、「開催契約」「開催都市契約」「スタジアム契約」等の契約書類については、「招致ブックの付録」として位置づけられ、「招致ブック」と一体のものとして取り扱われた。

「招致ブック」のFIFAへの提出に際しては、上記の「招致ブック本体」と「招致ブック情報テンプレート」に加えて、「招致ブック本体」と「招致ブック情報テンプレート」それぞれの電子データ、及び「招致ブック本体」で提案した日本の大会構想を映像化した招致映像を収納した「招致DVD」、さらに、招致映像を収納した「PSP（PlayStation Portable）」を同梱した。

「招致ブック」のFIFAへの提出部数は、招致契約書の規定により30部、「招致ブックの付録」である契約書類は、各契約書ごとに3部(写し2部を含む)とされた。契約書類は、すべての開催都市、すべてのスタジアム、トレーニングサイト、すべてのホテルとの契約書に及ぶため、その全体量は数万ページに達した。

### 「招致ブック」概要

- 「招致ブック本体」：A4判、234ページ、カラー（言語；英語）
- 「招致ブック情報テンプレート」：A4判バインダー、286枚、カラー（言語；英語）
- 「招致DVD」：招致ブック電子データ（言語；英語）
  - 招致ブック情報テンプレート電子データ（言語；英語）
  - 招致映像（言語；英語、仏語、西語、日本語）
- 「PSP（プレイステーションポータブル）」：招致映像（言語；英語、仏語、西語、日本語）
- 招致ブックの付録
  - 付録1：開催契約
  - 付録2：開催契約のための確認契約
  - 付録3：政府の支援（政府宣言、政府保証第1号～第8号）
  - 付録4：開催都市契約
  - 付録5：スタジアム契約一式
  - 付録6：トレーニングサイト契約一式
  - 付録7：ホテル契約
  - 付録8：法律意見書

### 「招致ブック本体」・「招致ブック情報テンプレート」目次構成

招致ブック本体		招致ブック情報テンプレート	
章	タイトル	No.	タイトル
第1章	招致国と開催都市の紹介	第1号	招致国の概略
		第2号	開催都市の概略
		第3号	招致国の休日の概略
		第4号	招致国の観光と行事
第2章	開催理念		
第3章	サッカーの発展		
第4章	持続可能な社会と人の発展		
第5章	環境保護		
第6章	スタジアム	第5号	スタジアム
第7章	開催地指定チームホテルと開催地指定トレーニングサイト	第6号	開催地指定チームホテル
		第7号	開催地指定トレーニングサイト
第8章	チームベースキャンプとチームベースキャンプトレーニングサイト	第8号	チームベースキャンプ
		第9号	チームベースキャンプトレーニングサイト
第9章	宿泊設備	第10号	ホテルの部屋数
		第11号	宿泊設備の概略
第10章	FIFA本部		
第11章	輸送	第12号	開催都市間の移動
		第13号	開催都市内の移動
		第14号	輸送インフラストラクチャ
		第15号	空港インフラストラクチャ
		第16号	航空機接続と移動時間
第12章	情報技術と通信ネットワーク		
第13章	安全とセキュリティ		
第14章	健康及び医療サービス		
第15章	競技会関連イベント	第17号	競技会関連イベント
第16章	メディア設備、通信及び広報		
第17章	放送権とマーケティング権	第18号	屋外メディア予約
第18章	資金調達と保険	第19号	支出予算
		第20号	チケット収入予測
第19章	政治体制		
第20章	既存の契約		

## 6.3 大会構想と提案スタジアム

### 6.3.1 2022年FIFAワールドカップ™日本大会構想

「招致ブック」の中核となる大会構想については、2009年4月16日の第3回FIFAワールドカップ招致検討委員会の議題にも上げられているとおり、早くから検討が進められてきた。

大会構想は、「招致ブック」に記されるだけでなく、日本の招致活動全般の方向性と戦略を提示するものである。また、大会構想は、単にワールドカップのためだけに考え出される特別なアイデアやプランではなく、JFAがこれまでに積み上げてきた活動という、実績の中から生まれるものであり、その活動の延長線上に位置すべきものとされた。

さらに、12年後に開催される大会の構想と言う視点から考察すれば、大会構想は、今後10年間におけるJFAのマニフェストともいうことができる。

2022年FIFAワールドカップ™日本の大会構想は、まさにそうした視点から検証されるとともに、FIFAが志向する世界サッカー発展への貢献、社会と人の持続的な発展への貢献という視点からの検討が加えられた。

2022年FIFAワールドカップ™日本の開催を通じて、どのように日本及び世界のサッカーの発展に貢献するか、どのような大会を開催することで社会と人の持続的な発展に貢献することができるのか。それらの問いに対して、日本だからこそできる、日本だけにしかできないオリジナルの提案を用意したのが大会構想である。

FIFAに提出した「招致ブック」に記された大会構想の概略は、以下のとおりである。



招致ブックに掲載された大会構想「次世代ワールドカップ」

### 2022年FIFAワールドカップ™日本 大会構想（概要）

## “208 Smiles”

2022年FIFAワールドカップ™日本。

世界はかつて経験したことのない、サッカーの本質的な魅力を“体験”することになるだろう。そこでは、FIFAに加盟する208の国と地域をはじめ、すべての人々が国や民族、文化、言語の壁を越えて、ワールドカップの感動と喜びを分かち合うことになる。貧困や差別、健康などの問題により観戦の機会を奪われることなく、すべての人が、笑顔でワールドカップを楽しむことができる。地球上の隅々にいたるまで、“笑顔をもたらすワールドカップ” —それが、日本の2022年FIFAワールドカップ™である。

## FIFA WORLD CUP™ THE NEXT GENERATION produced by JAPAN

日本は、“208 Smiles”を実現するため、世界サッカーの革新的かつ持続的な発展を担保する、“次世代ワールドカップ”を開発する。サッカーの発展と社会と人の持続的な発展と言う命題を確実に実行するため、そして“208 Smiles”の実現のため、日本は以下の提案を行う。

### 提案1：最先端テクノロジーによるサッカーコンテンツの革新

- Freeviewpoint Vision(自由視点映像)：スタンド内360度に設置された200個の高精細カメラが、ピッチ上の選手の動き、ボールの動きをあらゆる角度から捕らえ、スタジアム内の大型ディスプレイに映し出す
- Full Court 3D Vision：平置き型ディスプレイに浮かび上がる、ピッチ全体を俯瞰した立体映像は裸眼で観ることが可能。世界最先端の“超臨場感技術”がサッカーの新たな感動と興奮をもたらす

### 提案2：ファンフェストの革新：Universal Fan Fest in 208 Nations

FIFAに加盟する208すべての国と地域、約400ヶ所にUniversal Fan Fest in 208 Nationsを設置。Freeviewpoint Vision、Full Court 3D Visionの配信により、3億6000万人の参加者が、FIFAワールドカップ™の喜びと感動を体験する

### 提案3：次世代教育活動の革新

- 208 Kids Dream Japan Tour：FIFAに加盟する208すべての国と地域から約6,000人の子どもたちをワールドカップ親善大使として日本に招待
- 208 Kids Dream Workshop：JFAこころのプロジェクトのグローバル・バージョンのプログラムをFIFAに加盟する208すべての国と地域で展開
- 208 Kids Dream 基金：208 Kids Dream Workshopを全世界で持続的に実施するためのJFAの出資による新たな基金の設立

6.3.2 提案スタジアム・チームベース キャンプ

開催地自治体、開催候補スタジアム及びチームベースキャンプ候補地については、2010年1月8日に正式申請が締め切られた。その後、同年5月14日の「招致ブック」の提出まで間に、様々な情勢の変化に伴い若干の変動があった。

2022年FIFAワールドカップ™日本招致の最大の課題は、収容規模80,000人を満たすことが条件とされる開幕戦・決勝戦の開催スタジアムが存在しないことであった。この問題については関係各方面と再三にわたる折衝がなされ、慎重な検討が重ねられてきた。その結果、大阪市が大阪駅に隣接する北ヤードに、新たに80,000人の観客を収容する「大阪エコ・スタジアム（仮称）」を建設する計

画を立案することとなり、立候補を表明した。

このことにより、FIFAの規定を満たすスタジアムの提案が可能となり、招致活動における最大の課題が解決された。

当初、立候補を表明していた吹田市（大阪府）の「（仮称）吹田スタジアム」は、立候補を取り下げた。また、神戸市はユニバー記念競技場を正式に提案することとなった。

最終的に「招致ブック」に提案された開催地自治体・スタジアム及びチームベースキャンプは、以下のとおりである。

提案スタジアム・開催地自治体（11自治体・13スタジアム）

自治体名	スタジアム名
札幌市（北海道）	札幌ドーム
茨城県	茨城県立カシマサッカースタジアム
埼玉県	埼玉スタジアム2002
東京都	味の素スタジアム 国立競技場
横浜市（神奈川県）	日産スタジアム
新潟県	東北電力ビッグスワンスタジアム
静岡県	エコパスタジアム
豊田市（愛知県）	豊田スタジアム
大阪市（大阪府）	大阪エコ・スタジアム（仮称） 大阪市長居陸上競技場
神戸市（兵庫県）	ユニバー記念競技場
大分県	大分銀行ドーム

※（ ）内は自治体の所在都道府県

提案チームベースキャンプ（64件）

自治体名	トレーニングサイト名
網走市（北海道）	網走スポーツ・トレーニングフィールド
札幌市（北海道）	札幌サッカーアミューズメントパーク
札幌市（北海道）	白旗山競技場
遠野市（岩手県）	遠野運動公園陸上競技場
花巻市（岩手県）	花巻市スポーツキャンプむら
仙台市（宮城県）	仙台スタジアム（コアテックスタジアム仙台）
秋田市（秋田県）	秋田市八橋運動公園球技場
にかほ市（秋田県）	仁賀保グリーンフィールド
山形県 / 天童市	山形県総合運動公園
福島県 / 楡葉町 / 広野町	Jヴィレッジ
小美玉市（茨城県）	（仮称）小美玉スポーツシュレ公園
鹿嶋市（茨城県）	鹿嶋市高松緑地公園多目的球技場
神栖市（茨城県）	神栖市若松運動場
つくば市（茨城県）	フットボールスタジアムつくば

ひたちなか市（茨城県）	ひたちなか市総合運動公園陸上競技場
水戸市（茨城県）	ケーズデンキスタジアム水戸 / 水戸市立サッカー・ラグビー場
習志野市（千葉県）	習志野秋津サッカー場
成田市（千葉県）	サウンドハウス・スポーツセンター内 プレイテック・スタジアム
川崎市（神奈川県）	川崎市等々力陸上競技場
相模原市（神奈川県）	相模原麻溝公園競技場
長野市（長野県）	南長野運動公園総合運動場 総合球技場
松本市（長野県）	松本平広域公園総合球技場（アルウィン）
糸魚川市（新潟県）	美山陸上競技場
十日町市（新潟県）	当間多目的グラウンド
長岡市（新潟県）	長岡ニュータウン運動公園
金沢市（石川県）	金沢市民サッカー場
御殿場市（静岡県）	御殿場市陸上競技場
静岡市（静岡県）	清水ナショナルトレーニングセンター
沼津市（静岡県）	静岡県愛鷹広域公園 多目的競技場
藤枝市（静岡県）	藤枝総合運動公園サッカー場
豊田市（愛知県）	豊田スタジアム
伊勢市（三重県）	伊勢市朝熊山麓公園フットボール場
飛騨市（岐阜県）	飛騨市古川ふれあい広場
大津市（滋賀県）	皇子山陸上競技場
長浜市（滋賀県）	神照運動公園（長浜市多目的競技場）
守山市（滋賀県）	野洲川歴史公園サッカー場
堺市（大阪府）	堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター
吹田市（大阪府）	ガンバ大阪練習場
高槻市（大阪府）	高槻市立萩谷総合公園サッカー場 / 高槻市立総合スポーツセンター
神戸市（兵庫県）	ホームズスタジアム神戸
奈良県	奈良県立橿原公苑陸上競技場
和歌山県	紀三井寺公園陸上競技場
出雲市（島根県）	出雲健康公園
益田市（島根県）	島根県立サッカー場
広島市（広島県）	広島広域公園陸上競技場
香川県	香川県立丸亀競技場
徳島県	鳴門・大塚スポーツパーク ポカリスエットスタジアム
今治市（愛媛県）	桜井海浜ふれあい広場 / 上浦多々羅スポーツ公園
西条市（愛媛県）	ひうち陸上競技場 / 東予運動公園球技場
新居浜市（愛媛県）	新居浜市営サッカー場（グリーンフィールド新居浜）
松山市（愛媛県）	ニンジニアスタジアム
高知県	高知県立春野総合運動公園
北九州市（福岡県）	新設予定のスタジアム
福岡市（福岡県）	博多の森球技場（レベルファイブスタジアム）
島原市（長崎県）	島原市営陸上競技場 / 島原市営平成町多目的広場
長崎県	長崎県立総合運動公園新陸上競技場（仮称）
長崎市（長崎県）	長崎市総合運動公園かきどまり陸上競技場
熊本県 / 熊本市	熊本県民総合運動公園陸上競技場
佐伯市（大分県）	佐伯市総合運動公園
日田市（大分県）	鯛生スポーツセンター
豊後大野市（大分県）	サンスポーツランドみえ / 豊後大野市三重総合グラウンド
別府市（大分県）	実相市サッカー競技場 / 野口原総合運動場
指宿市（鹿児島県）	指宿いわさきホテル サッカー場
霧島市（鹿児島県）	霧島市国分運動公園（陸上競技場・多目的グラウンド）

※（ ）内は自治体の所在都道府県

※「/」による併記は連名による立候補の意

#### 6.4 「招致ブック」提出後 記者説明会の開催

「招致ブック」及び「開催契約書類」をFIFAに提出後の2010年5月17日、日本サッカーミュージアムにおいて、2022年FIFAワールドカップ™の大会構想に関する記者説明会を開催した。

説明会は、日本の開催コンセプト及び大会構想をメディアを通じて一般に説明し、日本国内における招致機運の醸成と、一般国民の招致への期待感を高めることを目的に行われた。

日本の開催コンセプト及び大会構想の詳細については、これまで招致委員会内部にとどめられ、一般に対しては一切情報開示してこなかった。これは招致戦略上取られた措置で、事前に他の招致国に情報が伝わり、日本のオリジナルな提案を模倣されたり、意図的にネガティブな情報を流されるなどの事態を避けるための対応策であった。

説明会では、冒頭、犬飼基昭委員長が挨拶に立ち、「日本の提案はユニークな提案であるとFIFAでも言われました。これをオフィシャルなスタートとし、FIFA理事にも支持を得られるように直接説明していきたい」と、今後の招致活動に向け抱負を述べた。

次に、丸山高人実行本部長から、FIFAに加盟する208の国と地域すべてに笑顔を届けるコンセプト「208 Smiles」についての説明が行われた。そして「208 Smiles」を実現するための、新たなサッカーコンテンツの開発や、世界400ヶ所に設置され、あたかもスタジアムにいるかのような興奮と感動を伝えるファンフェスト、さらに次代を担う世界中の子供たちを育成する教育プログラムなど、日本が目指す次世代ワールドカップの大会構想が、コンセプト映像とともに紹介された。

招致委員会ヒューマニティー&テクノロジー部会長である、慶應義塾大学環境学部長・村井純教授は、「人に対する信頼性、クオリティの高さにお

いて、日本は最高のものを持っています。提案しているサッカーコンテンツは、夢に満ちていてまるでSF映画のようと言われるますが、研究はすでに終わっており、その完成度において、自信をもって提案できるものです」とコメントした。



左から丸山実行本部長、犬飼委員長、村井慶應義塾大学環境情報学部長、田嶋JFA専務理事

## 第7章 FIFA ワールドカップ™南アフリカ大会の開催

### 7.1 招致国エキシビジョンへの出展

2010年6月11日、FIFAワールドカップ™南アフリカ大会が開幕した。また、開幕に先立つ6月9日・10日には、開幕戦及び決勝戦の開催される南アフリカ・ヨハネスブルグにおいて、FIFA総会が開催された。

FIFA総会では、FIFA理事をはじめFIFAに加盟するすべてのサッカー協会代表者、サッカーメディアなど、世界中のサッカー関係者が一堂に会する。そのため、FIFA総会は招致各国にとって数少ない絶好の招致アピールの場であった。

一方、FIFAにとっても、2018/2022年FIFAワールドカップ™招致にメディアの関心が集まることは好ましいことであることから、総会2日目の6月10日、FIFA総会会場において「招致国エキシビジョン」を開催した。

日本招致委員会は各招致国とともにブースを出展し、日本招致オリジナルグッズを配布するなど日本の招致活動をPRした。オリジナルグッズには、日本らしさをアピールするために特別に製作した「法被(はっぴ)」「扇子(せんす)」「手ぬぐい」を用意した。「208すべての国と地域に笑顔をもたらすワールドカップ」というコンセプトを表現するために、日本らしい真面目さと日本らしい楽しさを演出することを目標にしたこの企画は非常に好評で、招致国の中で際立つほどの人だかりができた。同時に「招致ブック」のサマリー版(英語、仏語、西語)も配布し、日本の提案内容への理解を深めてもらった。

日本の招致ブースには、招致アンバサダーであるジーコ元日本代表監督も応援にかけつけ、ブースを訪れた208の国と地域の関係者に日本招致をアピールした。



左から招致アンバサダーのジーコ元日本代表監督、ザウザウカンボジアサッカー連盟会長(AFC理事)、小倉FIFA理事(JFA副会長)、犬飼委員長(JFA会長)

**7.2 オブザーバーズ・プログラム等への参加**

**7.2.1 オブザーバーズ・プログラム**

2010年FIFAワールドカップ™南アフリカ大会期間中の2010年6月28日から7月1日の4日間にわたり、FIFA主催のオブザーバーズ・プログラムが開催された。オブザーバーズ・プログラムは、次回2014年大会を開催するブラジル組織委員会をはじめ、2018/2022年FIFAワールドカップ™招致立候補国を対象に行われたもので、実際の大会の現場を視察することにより、大会の施設や運営についての理解を深めることを目的としている。

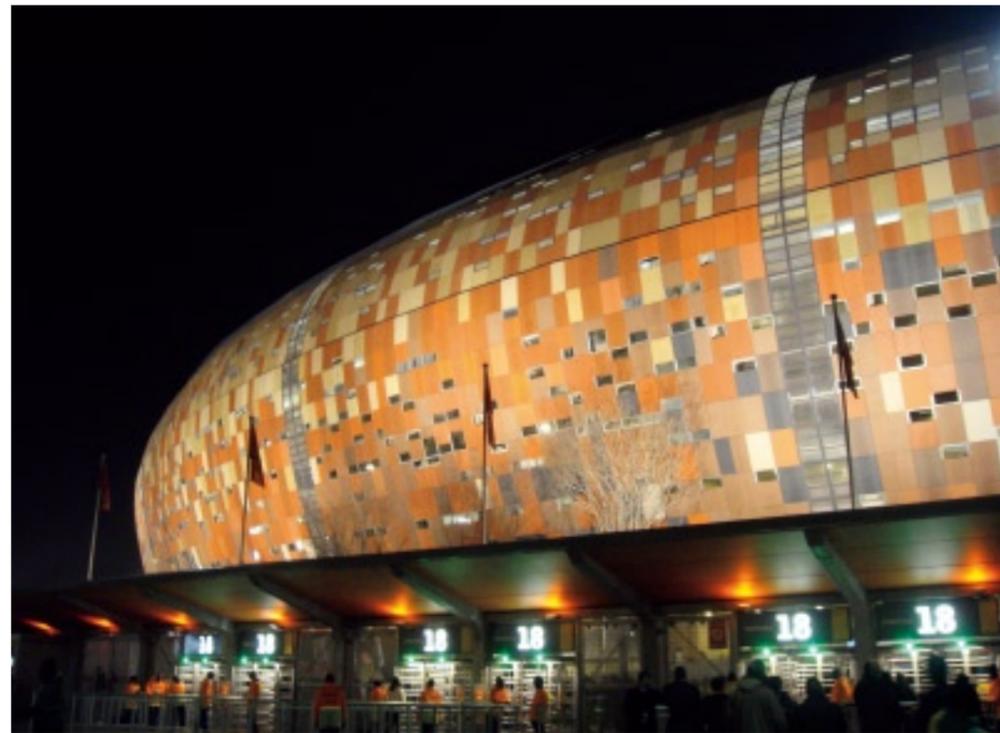
オブザーバーズ・プログラムには、日本をはじめすべての招致立候補国が参加した。

同プログラムへの参加により、競技運営及び競技施設の視察など、実際の大会現場の状況を体験できたことは大きな成果であった。また、日本が

目前に控えていたFIFAインスペクションについても、担当のFIFA事務局スタッフから直接、情報を得ることができた。さらに、イングランド、ロシア、カタール、韓国など、各招致立候補国との情報交換の場としても貴重な収穫が得られた。



サッカーシティスタジアム観客席。スタンドを周回するようにホスピタリティルームが設置されている



ヨハネスブルグ・サッカーシティスタジアム外観

2010年FIFAワールドカップ™オブザーバーズ・プログラムスケジュール

訪問都市	時間	プログラム内容
<b>第1日目 (6月28日 (月))</b>		
ダーバン	11:30-12:00	イントロダクション
	12:30-14:00	昼食 (ロシア、カタールの関係者と同席)
	14:30-18:00	スタジアムツアー～R16 試合視察 (オランダ対スロバキア)
	19:30-21:00	FIFA ファンフェスト in Durban 視察 (ブラジル対チリ)
<b>第2日目 (6月29日 (火))</b>		
ケープタウン	午前	移動
	15:30-22:30	スタジアムツアー～R16 試合視察 (スペイン対ポルトガル)
		メディアセンター (仮設)、メディアトリビューン、ホスピタリティエリア (ボックスシート) を視察
		韓国招致担当者へのヒアリング
	FIFA 招致担当クルゲン・ミュラー氏インタビュー (インスペクション及び評価レポートについて)	
<b>第3日目 (6月30日 (水))</b>		
ヨハネスブルグ	午前	移動
		イングランド招致担当者ヒアリング (インスペクション対応について)
	15:00-15:30	ウェルカムファンクション
	15:30-16:35	プレゼンテーション (マーケティング) *ファンフェスト含む 大会期間中のマーケティング対応組織体制、コマーシャルディスプレイ、フード/コンセッション、CSR、マーチャンダイジング、南ア国内のファンフェストについて
16:45-18:00	プレゼンテーション (チケットティング&ホスピタリティ) 総キャパシティ 3,731,231 枚 販売可能数 3,408,222 枚 総枚数 3,009,061 枚 販売済枚数 2,828,885 枚 一般向け販売枚数 1,850,000 枚	
<b>第4日目 (7月1日 (木))</b>		
ヨハネスブルグ	10:00-10:45	プレゼンテーション (TV) IBC について
	10:50-11:25	プレゼンテーション (メディア) メディアセンター、メディアオペレーションについて
	11:30-12:45	プレゼンテーション (競技)
	16:30-18:00	チームトレーニングセッション視察 (ウルグアイ) *チーム側の都合により中止
<b>第5日目 (7月2日 (金))</b>		
ヨハネスブルグ	10:00-11:45	プレゼンテーション (LOC/開催都市準備概要) *マーケティング、インフラ、輸送含む 南ア組織委員会 CEO、ヨハネスブルグベニューエグゼクティブダイレクター、マーケティング部門担当者による
	11:45-12:xx	プレゼンテーション (安全及びセキュリティ) ヨハネスブルグ市セキュリティ担当者による
	15:15-23:30	IBC ツアー～準々決勝試合視察 (オランダ対ブラジル<PV>、ガーナ対ウルグアイ)



FIFA 及び南アフリカ LOC によるプレゼンテーション

### 7.2.2 インターナショナルFIFA ファンフェスト (IFFF) 視察

FIFA ワールドカップ™南アフリカ大会開催期間中の6月24日から6月26日の3日間、ローマ及びパリにおいてインターナショナル FIFA ファンフェスト (IFFF) の視察を行った。

インターナショナル FIFA ファンフェストは、開催国以外の世界の主要都市で開催するもので、一般市民に対し大型映像システムによるパブリックビューイングを中心に、音楽コンサートなど様々なプログラムを提供する FIFA の新しい事業である。

2006年ドイツ大会では、開催国内で実施する FIFA ファンフェストが初めて開催されたが、この FIFA ファンフェストが大成功を収めたことから、FIFA は FIFA ワールドカップ™の価値をさらに高めるため、また、一般市民に対してより多くの観戦機会を設けるため、開催国のみならず世界中にファンフェスト会場を展開しようとしていた。

これは、日本が「招致ブック」で提案している「Universal Fan Fest in 208 Nations (ユニバーサル・ファンフェスト・イン 208 ネーションズ)」(FIFA に加

盟する 208 すべての国と地域でファンフェストを開催する計画で、世界中の約 400 ケ所で開催することを提案) と、同一のベクトル上にあるプロジェクトであった。

日本が提案する「Universal Fan Fest in 208 Nations」は、開催規模、超臨場感技術を用いた最先端の映像システム、及びそのコンセプトにおいて、FIFA が実施する IFFF とは本質的には異なるものであった。しかし、事業の実施によって描かれる将来像やベクトルが同じであることから、現状を調査しておく必要があった。

日本招致委員会実行本部では、急遽、インターナショナル FIFA ファンフェストが開催されているローマ、パリ、シドニーに、調査のため視察団を派遣した。視察に当たっては、インターナショナル FIFA ファンフェストのコンセプト、実施内容(プログラム・事業内容等)、マーケティング構造、会場選定の基本方針、実施運営等について情報収集を行った。

次表は、ローマ、パリの視察スケジュールを示したものである。



ローマのインターナショナル FIFA ファンフェストは、ローマ市の中心部の大きな公園に設置された。



パリのインターナショナル FIFA ファンフェストは、パリで一番の観光名所であるエッフェル塔のすぐ傍にあるトロカデロエリアに設置された。

#### インターナショナル FIFA ファンフェスト視察

訪問都市	時間	視察内容
第1日目 (6月24日 (木))		
ローマ	19:30-20:30	サイトインスペクション
	20:30-22:30	パブリックビューイングインスペクション (日本対デンマーク、オランダ対カメルーン)
第2日目 (6月25日 (金))		
ローマ	12:00-13:00	サイトインスペクション (ソニーの3D展示ブースを視察)
	13:00-14:30	ミーティング (現場の運営に従事するエレナ・マストロータ (FIFA マーケティング部門戦略プロジェクトマネジャー、マルツィア・ルラッシ (ナショナル・スポーツ・エージェンシー (NSA)、マルコ・ガンベラレ (NSA) の各氏に対し、運営体制、IFFF のコンセプト、マーケティング構造、会場選定基準、運営実施等についてヒアリング)
	16:00-18:00	パブリックビューイングインスペクション (ブラジル対ポルトガル)
第3日目 (6月26日 (土))		
パリ	14:00-14:30	サイトインスペクション
	14:30-15:50	ミーティング (ベノ・ロイ (スポーツイベントダイレクター):ジュリアン・グリマル (スポーツイベント IFFF 担当) に対し、組織体制、ビジネススキーム、運営等についてヒアリング)
	16:00-18:00	パブリックビューイングインスペクション (韓国対ウルグアイ)

### 7.3 FIFA ワールドカップ™南アフリカ大会におけるロビー活動

2010年6月11日に開幕したFIFA ワールドカップ™南アフリカ大会では、開催国決定の投票権を持つ24名のFIFA 理事も、それぞれの担当職務を行うため大会FIFA 本部、各開催都市のFIFA 支部等に滞在した。各招致立候補国にとっては、FIFA 理事に対し自国への招致をアピールする絶好の機会であった。

しかし、FIFA 事務局からは、大会期間中における各招致委員会からのFIFA 理事への接触を極力控えるよう通達が出されていた。これは招致立候補国の過剰な招致合戦にFIFA 理事が巻き込まれ、大会運営という本来業務の遂行ができなくなることを危惧したために取られた措置であった。

日本招致委員会としては、このFIFA 事務局の通達にしたがい、招致委員会としてのFIFA 理事への接触は控えた。ただし、大会には日本代表チームが出場していることから、幹部をはじめ多くのJFA 関係者が現地に滞在することとなった。滞在中にはスタジアム、ホテルを問わず、いたるところでFIFA 理事とも遭遇した。また、偶然にも接点があった場合には、当然のことながら挨拶を交わし旧交を温めることになった。

こうして、オフィシャルな招致活動については

制限されたものの、大会期間中はFIFA 理事との面談が相次いだ。また、今大会における日本代表チームの、自国開催以外の大会でのベスト16進出という活躍は、理事たちとの会話でも話題となり、招致活動においても大きな追い風となった。



招致国エキシビション。各国招致委員会と情報交換する小倉副委員長。

## 第8章 FIFA インспекション

### 8.1 FIFA インспекション概要

FIFA インспекションは、各招致立候補国にFIFA の調査団を派遣し、FIFA ワールドカップ™の開催運営に必要なスタジアム、トレーニングサイト、宿泊施設、輸送インフラなどを調査するものである。FIFA インспекションは、FIFA が設定する招致プロセスにおいても、極めて重要なイベントとして位置づけられている。

調査に際しては、招致立候補国から提出された開催契約等の契約書類を含む「招致ブック」をあらかじめ仔細に分析、示された内容に齟齬がないかを現地に調査することにより、当該国の開催運営能力を評価することを目的としている。

調査結果は、「招致ブック」の分析結果とともに、

後日、「評価レポート」としてまとめられ、FIFA 理事に提出される。開催国決定の投票権を持つ24名のFIFA 理事は、この「評価レポート」を参考に、投票行動をとることとされている。

2002年大会の招致活動時にも同様のインспекションが行われたが、必ずしもFIFA 理事の投票行動に影響を与えるようなレポートは提出されなかった。今回は2018年大会、2022年大会合わせて9グループ11カ国もの招致立候補国があるため、インспекションによる調査結果は、開催国決定に大きな影響力があると考えられた。

一方では、2022年大会については12年後の開催となるため、現時点においてどこまで開催能力の有無を評価できるのか、また、その評価の視点についても注目されることとされた。

#### FIFA ワールドカップ™南アフリカ大会期間中におけるロビー活動状況

月日	相手先及び内容	対応者
6月9・10日	レフカリティス FIFA 理事（キプロス）に挨拶	犬飼 JFA 会長、 田嶋 JFA 専務理事
	レオス FIFA 理事（CONMEBOL 会長）と面談	犬飼 JFA 会長、 田嶋 JFA 専務理事
	ハロルド・メイン・ニコルズ（チリ協会会長・FIFA インспекションチームリーダー）に挨拶	丸山招致実行本部長
6月15日	サルゲロ FIFA 理事（グアテマラ）、アヌマ FIFA 理事（コートジ・ボアール）レオス FIFA 理事（CONMEBOL 会長）に挨拶	田嶋 JFA 専務理事
	ドゥグ FIFA 理事（ベルギー）と面談	濱口エグゼクティブアドバイザー
6月16日	レフカリティス FIFA 理事（キプロス）と面談	濱口エグゼクティブアドバイザー
6月16日	アボリダ FIFA 理事（エジプト）と面談	田嶋 JFA 専務理事
7月8日	マクディ FIFA 理事（タイ）との昼食会開催	犬飼 JFA 会長ほか
7月9日	電通ガラパーティにおいてブラッター FIFA 会長はじめ各 FIFA 理事と会談	



関西国際空港に到着したFIFA インспекションチーム。左から W. アイヒラー、J. アベラール、J. ミュラー、小倉 FIFA 理事/JFA 副会長、H. メイン・ニコルズ団長、平松大阪市長、荒木大阪市長、D. ファウラー（右端）の各氏。

### 8.1.1 FIFAインспекション各招致国訪問日程

FIFA インспекションは、FIFA ワールドカップ™南アフリカ大会終了後の2010年7月下旬から、同年9月にかけて行われた。史上初となる2大会同時決定のため、インспекションチームは、わずか3ヶ月の間に2018年大会及び2022年大会の招致立候補国9グループ11カ国を調査することとなっ

FIFA インспекション各国訪問日程

日程	訪問国
7月19日～7月22日	日本
7月22日～7月25日	韓国
7月26日～7月29日	オーストラリア
8月9日～8月12日	ベルギー・オランダ
8月16日～8月19日	ロシア
8月23日～8月26日	イングランド
8月30日～9月2日	スペイン・ポルトガル
9月6日～9月9日	アメリカ合衆国
9月13日～9月17日	カタール

### 8.1.2 FIFAインспекションチーム・メンバー

FIFA インспекションチーム・メンバーは、評価の公平性を確保するため、基本的に同一の固定メンバーとされた。インспекションチームメンバーは5名。団長には、招致立候補国のない南米サッカー連盟から、チリサッカー協会会長であるハロルド・メイン・ニコルズ氏が任命された。団長

FIFA インспекションチーム・メンバー

役職	氏名(国籍)	所属
団長	ハロルド・メイン・ニコルズ(チリ)	チリサッカー協会会長
メンバー	ユルゲン・ミュラー(ドイツ)	FIFA 競技部門イベントマネージメント長 招致プロジェクトリーダー
	ウォルフガング・アイヒラー(オーストリア)	FIFA コミュニケーション部門
	デイビッド・ファウラー(スコットランド)	FIFA マーケティング部門
	ジュリオ・アベラール(ブラジル)	FIFA 競技部門

た。

インспекションの訪問順については、十分な準備期間が設定できること、また、各国でのインспекションの状況を把握できることから、スケジュール後半での訪問が有利と考えられていた。しかし、最終的にはFIFAが訪問ルート、気候等を考慮し、下記のとおり決定した。

以外の4名は、FIFA招致プロジェクトリーダーを務めるユルゲン・ミュラー氏をはじめ、いずれもFIFA各部門の専門スタッフであった。

インспекションチームの受け入れに際しては、各メンバーの国籍、使用言語、職務歴、来日経験、食事等の嗜好など、プロフィールについてのあらゆる調査が行われた。

## 8.2 FIFAインспекションの実施

### 8.2.1 FIFAインспекション日本訪問スケジュール

日本におけるFIFA インспекションは、2010年7月19日～7月22日の4日間で行われた。

インспекションの実施に当たり、あらかじめFIFAから要求のあった視察ポイントは、

- ・グループリーグスタジアム
- ・FIFA本部ホテル
- ・予選抽選会場・本選抽選会場
- ・FIFA総会会場

の各施設であった。

また、招致委員会とのミーティングについては、

- ・招致プレゼンテーションを行う「概論ミーティング(最大60分)」
- ・FIFAから討論すべき点を明らかにする「論点ミーティング(最大60分)」

の2つのミーティングをアレンジすることが求めら

れた。

加えて、各日のインспекション終了後に、FIFA内部による「総括ミーティング(60分)」を設定することが求められていた。

上記以外の視察ポイントの設定、ミーティングの設定については、基本的に各招致国にゆだねられた。3日間という極めて限られた時間の中で、どのように日本の運営能力の高さを見せるか。また、次世代ワールドカップの実現を提案する日本の大会構想を、いかにリアリティを持って説明するか。一方では、あまりに過密なスケジュールを組み込んで、インспекションチームに過重な負担をかけることは避けなければならなかった。招致実行本部では、視察スケジュール、視察場所、プレゼンテーションの方法をめぐり、本番直前まで検討を重ねた。

FIFA インспекション日本訪問スケジュール

時間	項目	実施内容	場所
【Day 0】7月19日(月・祝日)			
17:20	EK316 便空港到着	シップサイド出迎え	関西国際空港
17:35～17:45	プレスブリーフィング		
18:15～18:45	ヘリコプターにて移動	上空から大阪市内プレゼンテーション	関空ヘリポート
19:00	ホテル到着	招致委員会、ホテルスタッフによる出迎え	ザ・リッツ・カールトン大阪(以下、リッツ大阪)
19:05	ホテル内FIFAルーム到着	歓迎の挨拶、滞在中のガイダンス	リッツ大阪FIFAルーム
20:00	ディナー	招致委員会・JFA主催	リッツ大阪レストラン
【Day 1】7月20日(火)			
7:00～8:30	朝食		リッツ大阪ラウンジ
8:30～9:30	概要ミーティング	招致プレゼンテーション、インспекション・オリエンテーション	リッツ大阪会議室
9:45～10:45	論点ミーティング	FIFA サイドからの論点について質疑	リッツ大阪会議室
11:00～11:45	開幕・決勝スタジアムプレゼンテーション	平松大阪市長による大阪エコ・スタジアム(仮称)プレゼンテーション	リッツ大阪会議室
12:00～12:40	記者会見	招致委員会・大阪市合同会見	リッツ大阪会議室
12:00～13:00	インспекションチーム昼食		リッツ大阪FIFAルーム
13:10～13:50	FIFA 総会会場視察	プレゼンテーション及びインспекション	グランキューブ大阪
14:10～14:35	ファンフェスト会場視察	プレゼンテーション	大阪城公園迎賓館
14:35～14:55		ステージイベント	大阪城西の丸庭園
15:00～15:15	ヘリコプターにて移動	チームトレーニングサイト概要説明	
15:15～15:50	チームトレーニングサイト視察	プレゼンテーション及びインспекション	堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター

17:10~17:45	バスにて移動		
17:50~18:15	FIFA本部ホテル視察	プレゼンテーション及びインспекション	リッツ大阪
18:30~19:30	FIFA総括ミーティング	インспекションチームによるミーティング	リッツ大阪 FIFA ルーム
19:30~21:15	ウエルカムディナー	大阪市・招致委員会主催ディナー	大阪市公館
<b>【Day2】 7月21日 (水)</b>			
7:00~8:30	朝食		リッツ大阪 FIFA ルーム
8:30~9:10	ホテル出発、伊丹空港に移動		伊丹空港 VIP ラウンジ
9:30~10:40	JAL110便にて羽田空港		羽田空港
10:40~11:00	車にて芝浦ヘリポートに移動		芝浦ヘリポート
11:00~11:30	ヘリコプターにて埼玉に移動	上空から国立競技場視察	東京上空
11:30~12:30	グループリーグスタジアム視察	インспекション及びプレゼンテーション	埼玉スタジアム2002
12:30~12:50	ヘリコプターにて東京に移動		芝浦ヘリポート
13:15~14:00	昼食		プリンスパークタワー東京
14:00~14:30	開催地チームホテル視察	プレゼンテーション及びインспекション	プリンスパークタワー東京
14:50~15:30	抽選会場視察	プレゼンテーション及びインспекション	東京国際フォーラム
15:50	ホテル到着		ザ・リッツ・カールトン東京 (以下、リッツ東京)
16:30~17:30	FIFA総括ミーティング	インспекションチームによるミーティング	リッツ東京 FIFA ルーム
17:55~18:30	総理大臣表敬訪問	菅総理大臣と懇談、写真撮影	総理大臣官邸
18:30~19:55	フェアウェルディナー	総理大臣主催ディナー	総理大臣官邸小ホール
<b>【Day3】 7月22日 (木)</b>			
7:30~9:00	朝食		リッツ東京 FIFA ルーム
9:00~11:00	招致プレゼンテーション	大会構想等日本の提案に関するプレゼンテーション	リッツ東京会議室
11:15~11:45	ファイナルミーティング		リッツ東京会議室
12:00~13:00	昼食		リッツ東京 FIFA ルーム
13:00~13:10	記者会見 (第1部)	FIFA・招致委員会合同会見	リッツ東京会議室
13:15~13:45	記者会見 (第2部)	招致委員会会見	リッツ東京会議室
13:30~14:30	FIFA インナーミーティング		リッツ東京 FIFA ルーム
15:00	ホテル出発	招致委員会、ホテルスタッフによる見送り	
15:30	羽田空港にて出発セレモニー	招致委員会スタッフによる	羽田空港
16:35	NH便にて韓国・金浦空港へ出発		

\*青字はFIFA指定のプログラムを示す

### 8.2.2 Day0 (7月19日 (月・祝))

7月19日はインспекションチームの到着が夕刻であったため、インспекション・スケジュールにはカウントされずDay0とされていた。しかし、来日初日ということから、日本への良好な印象の形成を促すため、細心の配慮がなされた。

#### ●FIFA インспекションチーム到着

関西国際空港に到着したFIFA インспекションチームを、小倉FIFA理事 (JFA副会長)、丸山実行本部長、五香実行本部チーフダイレクターがシップサイドにて出迎え、日本訪問を歓迎した。その後到着ターミナルにおいて、開幕・決勝戦開催予定地である大阪市の平松市長、荒木市会議長が出迎え、両氏を交えてプレスブリーフィングを実施した。

小倉FIFA理事から、「視察団の皆さんをお迎えすることを楽しみにしていました。日本にはFIFAが求めるワールドカップの開催要件を満たす、すべての準備が整っています。明日からの視察では、日本の運営能力、ポテンシャルの高さを存分にご確認下さい。」との挨拶が行われた。

#### ●開幕・決勝戦スタジアム予定地インспекション

関西国際空港でのプレスブリーフィングを終えたFIFA インспекションチーム一行は、宿泊先のザ・リッツ・カールトン大阪に向けて出発した。移動にはヘリコプターが用意された。これには移動時間の短縮と、開幕・決勝スタジアムとなる「大阪エコ・スタジアム (仮称)」予定地を、上空から視察するという2つの目的があった。

「大阪エコ・スタジアム (仮称)」についての詳細なプレゼンテーションは翌日に予定されていたが、事前に上空から予定地を視察することにより、大都市・大阪のまさに中心にスタジアムが建設される計画であることを、強くイメージさせることを狙いとした。機内では平松大阪



FIFAメンバーを乗せ大阪を上空からアピールした。



空港内に設置されたFIFAインспекション・チームへのウエルカム・ボード。



機内ではビジュアルを駆使し、効率的かつ効果的に大阪市の開催能力の高さの説明が行えるようiPadを使用したプレゼンテーションが行われた。

市長が、大阪大都市圏の概要を説明するとともに、大阪駅北ヤードのスタジアム建設予定地を指差して、新たに建設される予定の都市型スタジアムの魅力を熱く解説した。

また、スタジアム予定地に至る途中には、サムライブルーにライトアップされた大阪のシンボル・通天閣の上空を通過した。

### 8.2.3 Day1 (7月20日 (火))

インспекション初日となる Day1 には、FIFA から要求された概要ミーティング、論点ミーティングの他、FIFA 総会会場、ファンフェスト会場、チームトレーニングサイト、IBC (国際放送センター)、FIFA 本部ホテルの視察など、分刻みのスケジュールが盛り込まれた。

特に留意されたのは、開幕・決勝戦開催地としての大阪の、優れたファシリティと招致に向けての市民レベルの盛り上がり、そして、「大阪エコ・スタジアム (仮称)」のプレゼンテーションであった。

#### ●概論ミーティング

概論ミーティングは、午前8時30分から、ザ・リッツ・カールトン大阪2階ザ・グランド・ボールルームで行われた。会議には、5名のFIFAインспекションチーム、犬飼委員長をはじめとする日本招致委員会関係者、鈴木文部科学副大臣、平松大阪市長が参加した。

会場内には、「大阪エコ・スタジアム (仮称)」の模型が置かれた大阪市中心部のジオラマが設置され、その周囲を囲むように各出席者の席が用意された。

司会の丸山実行本部長による日本側出席者の紹介が終わると、犬飼委員長が挨拶に立ち、歓迎の言葉を述べるとともに、「インспекションを通じて日本のポテンシャルと、未来のワールドカップを開催したいとする日本の熱意を感じてほしい」と述べた。

と述べた。

続いて、鈴木文部科学副大臣が挨拶し、「日本国政府はこの素晴らしいチャレンジにできる限りの取り組みをしてみたい」と、日本政府として大会の開催を支援することを表明した。

その後、田嶋 JFA 専務理事がスクリーンに映し出されたスライドにしたがって、日本の立候補理由と招致コンセプトについて説明した。ここではあくまで招致コンセプトの説明に止め、テクノロジーの解説など大会構想の詳細な説明については、最終日の招致プレゼンテーションで行うこととした。

最後に、丸山実行本部長より、3日間のインспекションの行程について説明を行った。

休憩を挟んだのち「論点ミーティング」が行われた。論点ミーティングのテーマは、「招致ブック」の内容に関する質問や確認事項について、インспекションの2週間前までに FIFA から各招致国に送られることとなっていた。しかし、いずれの事項についても事前に FIFA 事務局に対し回答・解決済みであったため、会議では、いくつかの質問とそれに対する補足説明が行われ、約15分で終了した。



FIFAインспекションチーム一行をホテルで出迎える川淵顧問/JFA名誉会長

#### 田嶋 JFA 専務理事プレゼンテーション

みなさんこんにちは。私が JFA 専務理事の田嶋幸三です。

日本が立候補した理由と日本の招致コンセプトについてご説明します。まずはこちらの映像「Digest of Japan Bid」をご覧ください。

#### 【映像】

ありがとうございます。いかがでしたでしょうか。日本は12年後、2022年の世界と社会を想定し、よりサッカーが発展するように、そして、地球上のより多くの人たちがサッカーに触れることができるように招致コンセプトを策定しました。

2002年のワールドカップの際、世界中の数多くのサッカーファミリーとサッカーファンに日本に来てもらい、大会後には多くの方々から称賛を受けました。そのキーワードとなっていたのが「スマイル」です。FIFAは大会後、2002年大会を「World Cup of Smiles」と呼び、高い評価を頂きました。12年後のワールドカップではこのスマイルを、私たちや、日本を訪れた方たちだけではなく、世界の隅々、208の加盟協会に広げたいと考えているのです。そのために、次世代のワールドカップという大会構想を紹介させていただきます。

招致ブックの中には、5つのプロポーザルを提示しました。

1. 最先端テクノロジーによるサッカーコンテンツの革新
2. スタジアム体験の革新
3. ファンフェストの革新
4. インターネット事業の革新
5. 次世代育成活動の革新

なぜ日本が立候補し、このような提案をしているのかについて説明します。

理由の一つ目は、日本は2002年日韓大会を開催したからこそ再び立候補したということです。ご存知のように2002年のワールドカップは共同開催でした。韓国と共同でやることで、多くの得るものもあり、私たちは大変満足しました。それでもまだ、やり残したことがあります。もっと多くの人にワールドカップを楽しんでもらえるんじゃないか、そしてもっと世界中にワールドカップの素晴らしさを伝えられるのではないかと。2002年からでは早すぎるという人がいます。私たちの中には、2002年の記憶があり、もっと素晴らしいものにしたい、もっと素晴らしいものにできるという自信があります。だからこそ、2022年に手を挙げたのです。

まだ1度もやっていない国に譲ったらどうだ、そういう人もいます。しかし、世界のサッカーの発展、多くの人たちにワールドカップの素晴らしさを伝え、その喜びを感じていただく、世界のサッカーの発展を考えるとそれは早すぎることはない、という気持ちで私たちはいっぱいなのです。これまで多くのFIFAの大会を行い、そこで培った運営能力、そして次世代のワールドカップをクリエイティブに実現できるのは、私たちがこの確信があるからこそ、今回この招致に手を挙げました。

日本のサッカーは、発展しています。Jリーグがここまで発展し、男子も女子も様々なユースカテゴリーの世界大会にも出場、南アフリカのワールドカップではベスト16でパラグアイにPK戦で敗れ9位という成績でしたが、着実に私たちは発展しています。

2番目に、日本は世界中とワールドカップを共催し、ワールドカップの喜びを共有したいと考えているからです。

FIFA プラッター会長は、サッカーはユニバーサルランゲージであるとおっしゃっています。人類最大のコミュニケーション装置です。私たちは Humanity & Technology という言葉を使い、単純に技術的な発展だけをサッカーに取り入れるだけではなく、そこに Humanity、日本人が最も大切にしている Humanity の部分を取り入れ、サッカーの素晴らしさを発信したい、そして発信する自信があるということです。今までのワールドカップでは開催国に来てください、という提案でした。そして多くの観客に集まっていただき、300万人以上の観客に喜んでいただく、それをもっと発展させ、世界中の人々にそれを体験してもらえよう大会にしたいのです。つまり、2022年の大会を世界と共催したいのです。そのために、世界中のみんながまるでスタジアムにいるようなゲームに参加するかのよう、かつてない感動と興奮のワールドカップを作りたいのです。そのためのテクノロジーについては、このインспекションで皆さんにご覧いただくことになっています。

3番目の理由は、日本の次世代育成活動の革新へのビジョンです。

皆さんにお約束します。私たちは208のすべての加盟協会から最低1チーム、世界中から6,000人以上の子供たちを日本に招待します。そこで、もちろん子供たちにはスタジアムでワールドカップを観戦してもらい、世界のトップレベルのサッカーを肌で感じてもらい、夢を持つことの素晴らしさを体験してほしいと思います。そして、ユニバーサルエデュケーションをクリエイティブにし、夢を持つことの素晴らしさ、環境の大切さ、平和の大切さ、人種や民族や宗教を超えた相互理解の重要性を6,000人の子供たちに伝えたいと考えています。このユニバーサルエデュケーションは、FIFA、国際機関とも協力して作っていく必要があるでしょう。そしてこの子供たちは、日本の各地に散らばり、サッカーの大会にも参加し、この世界共通の教育を経てまた日本でしかできない平和教育等も準備したいと考えています。

皆さんにお伝えしておきたいのは、この活動はワールドカップ招致のためにいきなり準備したわけではないということです。子供の次世代教育がいかに大切かを考え、日本でも1,735回の、海外でも3回の次世代教育を行っています。これがあるからこそ、この提案ができるのです。

私たちはこの6,000の若木を日本で植えます。そして彼らは自分の国に帰り、将来サッカー選手としてワールドカップに帰ってくるもの、その夢がかなわなくても平和、相互理解、環境といったことで、その国でそれぞれのポジションで活躍できる人間に育っていくに違いありません。そして我々は、次世代教育をこの6,000人だけで終わらせるつもりはありません。

ワールドカップで得た収益をもとに、ファンデーション(財団)を作り、その後もこの次世代教育活動を世界中に展開したいと考えています。FIFAがすでに行っている、Football for Hope などとも協力し、世界中の子供たちに次世代育成活動を広めていくことを約束します。これは、世界No.1のスポーツで、世界No.1の大会を持つサッカーだからこそできることだと確信しています。

サッカーには、力があります。人を変える力、社会を変える力、世界を変える力があると信じています。まさに More than just a Game なのです。その力を2022年の進化したワールドカップでぜひ世界中に示したい、これが私たちの2022年の招致に立候補した思いです。

12年後の未来の社会にふさわしい形で、サッカーの、ワールドカップの持つポテンシャルを最大化し、ワールドカップの興奮と感動をアジア、そして世界中に根付かせる。日本は世界のサッカー、そしてFIFAの永続的發展に貢献するというビジョンを持って立候補しています。

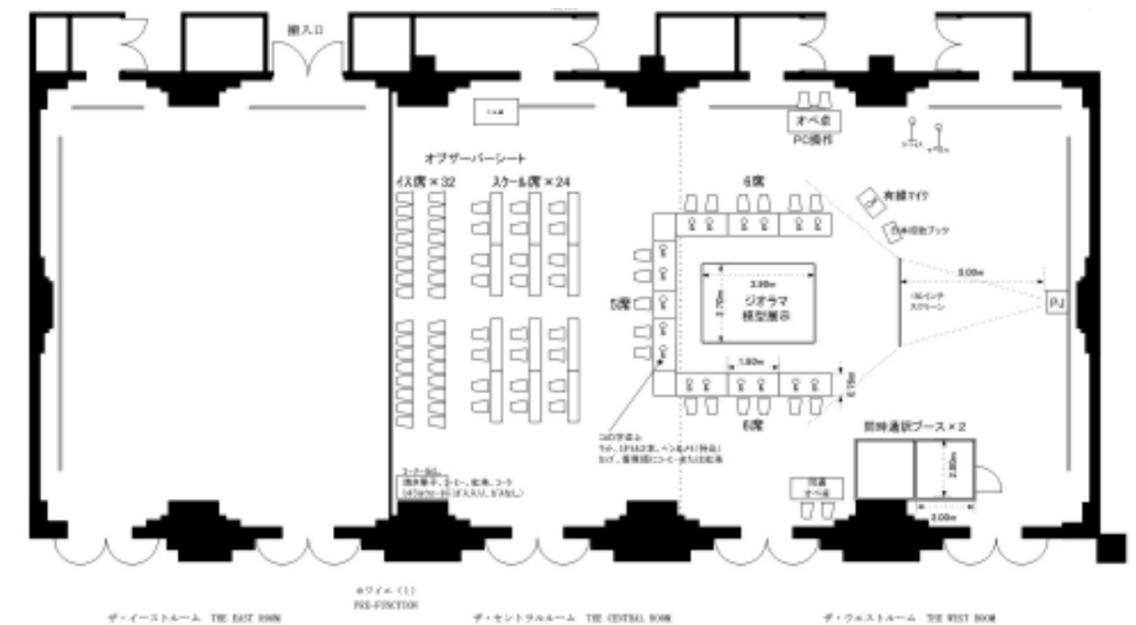
そして、誠実さと勤勉さ、平和と協調を重んじる人間性と最先端の技術力を兼ね備えた日本なら、未来をにらみ、そのビジョンを実現することが可能です。

かつてないスケールで地球をひとつにする新次元のワールドカップ、日本の構想“208 Smiles” “World Cup, the Next Generation” には、そのような日本の意志が込められています。

概論ミーティング・論点ミーティング出席者

所属	氏名(役職)
FIFA インспекションチーム	ハロルド・メイン-ニコルズ 団長 (チリサッカー協会会長)
	ユルゲン・ミュラー (FIFA 競技部門イベントマネージメント長)
	デイビッド・ファウラー (FIFA コミュニケーション部門)
	ウォルフガング・アイヒラー (FIFA マーケティング部門)
	ジュリオ・アベラール (FIFA 競技部門)
JFA	犬飼基昭 会長 (日本招致委員長)
	川淵三郎 名誉会長
	小倉純二 副会長 / FIFA 理事
	大仁邦彌 副会長
	田嶋幸三 専務理事
日本政府	鈴木 寛 文部科学副大臣
大阪市	平松邦夫 市長
2018/2022年 FIFA ワールドカップ™ 日本招致委員会 実行本部	丸山高人 本部長
	五香純典 チーフダイレクター
	平井 徹 国際部門ダイレクター
	貝瀬智洋 政府/自治体部門ダイレクター
	野上宏志 事業部門ダイレクター
	種蔵里美 コミュニケーション部門広報担当ダイレクター
	小西あい 国際部門マネージャー

概論ミーティング・論点ミーティングレイアウト図



## ●開幕・決勝スタジアムプレゼンテーション

開幕・決勝スタジアムのプレゼンテーションは、日本招致委員会にとって極めて重要な位置付けにあった。それは、現状において開幕・決勝スタジアムの FIFA 要件を満たす 8 万人収容規模のスタジアムが日本に存在しないことに起因する。FIFA プラッター会長は、内々には横浜・日産スタジアムでも開催可能と発言したが、FIFA の 24 人の理事を説得するためには、どうしても 8 万人収容可能な新スタジアムが必要であった。

もう一つの懸案事項は、開幕・決勝戦の開催地として首都である東京を提案していないことである。これまでのロビー活動の中で、何人かの FIFA 理事に指摘されたのは、「なぜ、首都・東京に開幕・決勝スタジアムがないのか」ということであった。これに対し、「なぜ大阪なのか、大阪でなければならないのか」という、ポジティ

ブで明快な回答を用意する必要があった。このプレゼンテーションには、大阪のポテンシャルとその優位性を、FIFA インスペクションチームに明確に印象付けるという重要な目的があった。

丸山本部長の概要説明の後、開幕・決勝戦の開催地となる大阪市の平松市長が、大阪の未来都市構想とその中核となる「大阪エコ・スタジアム（仮称）」の計画について、プレゼンテーションを行った。スライドとジオラマを用いたプレゼンテーションでは、大阪都市圏のダイナミズムとともに、環境に配慮した世界をリードする最先端、最高水準の大阪エコ・スタジアム（仮称）の計画が、リアリティを持って伝えられた。



大阪エコ・スタジアム（仮称）完成予想図

## 平松市長プレゼンテーション（要旨）



平松邦夫 大阪市長

大阪市長の平松です。ようこそ、大阪へ。

FIFA を代表する皆様をこうして迎えられることを非常にうれしく思います。

さて、この時間は、私からサッカーそしてスタジアムを中核とする大阪の未来都市構想についてお話しさせていただきます。

1400 年以上もの歴史を持つ大阪は、古くからシルクロードの終着点としてアジアに開かれたビジネス中心の国際都市として発展してきました。

その歴史の中で、ユーラシアの隅っこ、辺境にある大阪には、外から常に新しい文化を貪欲に取り入れ、そして積極的に新しいものを生み出し発信する進取の気風が育まれてきました。

多様な文化を受け入れ、柔軟で包容力にあふれた大阪人は、日本で最も気さくで親しみがある人々ともいわれます。ちなみに日本でチリワインが最も飲まれているのはこの大阪です。

現在、京阪神大都市圏には 1800 万人もの人々が住み、東京首都圏と並ぶ日本を代表する産業集積地、巨大な文化圏となっています。京都、神戸までを含む大阪市を中心としたメガリージョンは、世界的な視点で見ても、都市環境や経済力で、大阪都市圏はトップレベルにあります。

知る人ぞ知る、ですが、世界中のリチウム電池の半分はこの大阪で生産されています。南アのネルソンマンデラベイ、ダーバン、グリーンポイントの 3 つのスタジアムの屋根は、この大阪の太陽テントという会社が施工しました。あのパナソニックもこの大阪市が創業地であり本社を置いています。

エリア内に 3 つの空港、大規模港湾を持ち、この大阪はアジア、世界に開かれた都市として、まさに成熟を迎えようとしています。

しかし経済、産業が成熟する一方で、この巨大都市大阪は、今後も人々が豊かに暮らす都市であり続けられるだろうか？もっと人間にとって大事なことがたくさんあるのではないかと。

未永くここに暮らしたい、子どもを産み育てたい、人々がこの大阪を愛し続ける。そのような街にしたいと願う私たちは考えました。サッカーとスタジアムを媒介として今まで以上に人々がふれあい、語り合い、そして老若男女が心豊かに暮らしていける都市にしよう、と。

Football は世界の共通言語です。Football の持つエンターテインメント性とコミュニケーション促進力、さらには次世代の教育機会を創出する力は測り知れません。

2002 年の FIFA ワールドカップはもちろん、これまで多くのスポーツの国際大会を経験している大阪は、その重要性と必要性を十分に認識しています。



発展する大阪都市圏

経済と歴史・文化、スポーツが高度に融合し、真に豊かな町となっていく。そのような21世紀の未来都市構想が「The Next Generation Metropolis, OSAKA」です。

それではみなさん、ジオラマにご注目ください。

1日に250万人が乗降する日本最大級のターミナル大阪駅。

大阪エコ・スタジアムは、その大阪駅に隣接し、まさに都市経済と産業、交通と商業、市民の生活の心臓部に建設されます。1日250万人が乗降する駅を降りればそのままスタジアムの観客席へ。スタジアムの周辺には様々な施設が完備され、試合前も試合後も、ファン、サポーターたちを飽きさせません。私たち大阪の力をもってすれば、8万人の観客をマジックのように移動させ、楽しませられるでしょう。

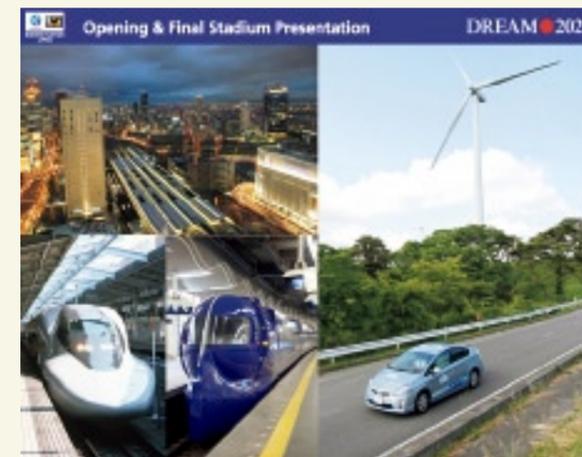
スタジアムのすぐ隣の第一区画はすでに現在建設中です。約7haのエリア。オフィス、様々なレストランを含む大型ショッピングモールと、憩いの場となる緑あふれる公園、住居などが整備されます。さらにその横には世界中の頭脳を集めた最先端の科学技術研究機関が集まるナレッジキャピタル。

北ヤードは経済・商業施設、居住空間、教育機関、エンターテインメントなど、すべての都市機能が集約されるのです。大阪エコ・スタジアムは、毎日数百万人以上の人々が行き交う複合型施設となり市民生活の中心的存在となるのです。

大阪エコ・スタジアムはその名前の通り、地球環境にも配慮したスタジアムとなる予定です。スタジアム屋根部分等への高効率な太陽電池パネル、蓄電池の設置による太陽光発電、周辺地域の風力発電及びごみ焼却場からのバイオマス発電等による電力の供給により、スタジアムのすべてのエネルギーをカーボンフリーエネルギーによって賄うことに挑戦します。

壁面緑化の徹底、都市の風の通り道に配慮した建設でヒートアイランド現象を防ぐなど、都市の環境保全にも高度に対応していきます。

スタジアム内で用いられる容器は、すべて生分解性プラスチック容器等を活用するなど、ゼロ・エミッションの実現により、消費ではなく再生を目指すスタジアム施設運営を図る予定です。



大阪に集積する最先端技術をアピール

高度な浄化処理設備を付帯した雨水貯留槽により、芝生の散水、トイレの洗浄水としてはもちろん、飲用水としても活用される予定です。

また、限りある資源を再生するリサイクル技術もここで活用します。ここにあるガラス瓶からできた再生ガラスですが、特殊な技術を使い再生ガラスから植物を再生させています。

これらの高度なエコ対応は、都市の環境保全という観点でこの大阪、アジアから世界への模範となるものと自負します。

このように最新の建築技術や施設設計、情報通信設備、安全設備など、あらゆる領域において日本が誇る最先端のテクノロジーを反映いたします。

12年後の未来において、世界最先端、最高水準のファシリティを備え、世界に新たな価値を発信し、サッカー文化をリードする次世代型スタジアムが誕生します。

そして大阪エコ・スタジアムは大阪の人々、ひいてはアジアの人々の豊かな生活に大きく寄与し、我々の多大なる財産となるはずです。

是非ともアジアの中心となるこの大阪の地で2022年、ワールドカップの開幕、決勝戦を実現したい。これは私の夢であり、このメガリージョンに住む1800万人の、いや日本とアジアに暮らす数十億の人々の未来に幸せをもたらすものであります。

## ●ファンフェスト会場視察

ファンフェスト候補会場の視察は、FIFAの要求視察ポイントには指定されていない。しかし、FIFAに加盟する208すべての国と地域、約400ヶ所で展開するUniversal Fan Fest in 208 Nations(ユニバーサル・ファンフェスト・イン208ネーションズ)の提案への理解を得るためには、ファンフェスト会場の視察は日本として必要不可欠であった。そのため、計画段階の早くからこの視察をスケジュールに組み込んでいた。

当初、大阪市のファンフェスト会場はクローズドサーキットを想定し、大阪城ホールが設定されていた。その後、6月にはFIFAワールドカップ™南アフリカ大会を視察し、またローマ、パリで開催された国際ナショナル FIFA ファンフェスト(IFFF)の視察を行った。その結果、FIFAの志向するファンフェストが、単にクローズドサーキットのみならず、3万人規模のサポーターが試合を寛いで観戦し、様々なエンターテイメントプログラムを楽しむとともに、サポーター同士が交流できる場であることを確認した。

そこで、会場を大阪城ホールに隣接する大阪城西の丸庭園に変更し、大阪城ホールと一体となったファンフェスト会場としてプレゼンテーションを行った。

大阪城公園の駐車場に到着したインспекションチームは、2人乗りの人力車に乗り換え、プレゼンテーション会場である西の丸庭園内の大阪迎賓館に向かった。ここでは、セレッソ大阪のキッズ、サポーター約500名が、インспекションチームの到着を拍手と歓声で迎えた。

大阪迎賓館では、平松大阪市長によるプレゼンテーションが行われ、メイン-ニコルズ団長をはじめインспекションチームのメンバーは、仰ぎ見る壮麗な大阪城と、みどりに溢れる西の丸庭園の見事なコントラストに、十分に納得した様子であっ

た。

プレゼンテーションが終了し、インспекションチームが庭園の芝生広場に出ると、待ち構えていたキッズ、サポーターから一斉に、ニッポンコール、オオサカコールが沸きあがり、ステージに導かれたインспекションチームのメンバーが紹介された。

続いて、招致アンバサダーの元日本代表・森島寛晃氏、招致特別広報大使のアトムが登場し、ワールドカップの大阪開催を望む子供たちから寄せられたメッセージボードが、インспекションチームに披露された。



ファンフェスト会場候補である西の丸庭園でのサポーターとの交流



FIFA インспекションチームをハイタッチで見送るサポーター

## ●チームトレーニングサイト視察

チームトレーニングサイトの視察は、2010年4月に完成して間もない堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンターで実施した。チームトレーニングサイトについて、日本は「招致ブック」に、42ヶ所の開催地チームトレーニングサイトと、64ヶ所のチームベースキャンプトレーニングサイトを提案している。

ここでの視察の目的は、堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンターのみならず、それら提案したすべてのトレーニングサイトの快適性をプレゼンテーションすることであった。同時に、キッズからシニアまでの幅広い年齢層の市民が、いつでも、安全で快適にサッカーを楽しむことができる環境が日本にはある、そしてそれは2002年大会のレガシーである、ということを実証するために設けられたプログラムである。トレーニングサイトという視点から、プロレベルだけではなく、草

の根レベルから日本のサッカー文化の奥行きを伝えようとしたのである。

堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンターでは、竹山修身 堺市長、川淵三郎 堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター名誉センター長(JFA名誉会長)、柿本卓志 堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター長、藤縄信夫(社)大阪府サッカー協会専務理事が、FIFAインспекションチーム一行を出迎え、プレゼンテーションに臨んだ。

また、視察には、折から子どもたちのサッカースクールを行っていたラモス瑠偉氏(元日本代表、ビーチサッカー日本代表監督)も途中から加わり、ブラジルから来日した当時に振り返り、日本のサッカー文化の目覚ましい発展についてメッセージを送った。



メイン-ニコルズ団長(左)とラモス瑠偉氏(右)

### ●大阪市・日本招致委員会主催ウェルカムディナー

FIFA インспекション Day1 の締めくくりには、ホストシティである大阪市と日本招致委員会によるウェルカムディナーが行われた。主賓であるFIFA インспекションチームに加え、大阪経済界を代表する方々にもゲストとしてお越しいただいた。大阪が、官民を挙げてFIFA ワールドカップ™の開催を熱望していることを強く印象付けるとともに、フレンドリーな大阪の気質を理解してもらおうとの狙いがあった。

インспекションチームは翌日早朝には東京に移動するため、大阪での最後の夜を寛いだ雰囲気の中で過ごしていただく趣旨で、大阪市公館の芝生の広がる庭園でバーベキューパーティを行うこととした。また、ドレスコードはスマートカジュアルとした。

ウェルカムディナーには、FIFA 総括ミーティングのため、主賓のFIFA インспекションチームが遅れて参加することがあらかじめ予定されていた。午後7時30分、ホストである平松大阪市長が歓迎の挨拶を行い、開宴となった。

ウェルカムディナーは、終始和やかに行われ、FIFA インспекションメンバーを囲んで、そここに歓談する輪ができた。

午後9時の散会に近づいたところで、川淵三郎日本招致委員会顧問が御礼の挨拶に立った。挨拶では、ホストを務めていただいた平松市長、及びFIFA 視察団を迎えていただいた大阪経済界のゲストに感謝を述べるとともに、インспекションチームメンバーに対し、

「ニコルズ団長をはじめとする視察団の皆さん、今宵は大阪の皆さんの招致にかけるパッションを充分にご理解いただけたのではないのでしょうか？」

このパッションが、未来への夢を切り開いて行くものと、私は確信しています。

JFAは「JFA2005年宣言」として「DREAM- 夢があるから強くなる」というスローガンを掲げています。

ワールドカップを単独開催すること、そしてそのワールドカップで優勝すること。

そして、その喜びを日本中、そして世界中と分かち合うこと。

これは、我々にとって必ず成し遂げたい、大きな大きな夢の実現です。

大阪市という大変心強いパートナーを得て、日本のサッカーも夢の実現に近づいてゆけると思います。」

と、スピーチした。



芝生の庭園で行われたウェルカムディナー



挨拶に立つ川淵顧問/JFA 名誉会長

### 8.2.4 Day2 (7月21日 (水))

Day1 で大阪の視察日程を終了したFIFA インспекションチームは、7月21日早朝、大阪・伊丹空港から東京・羽田空港に向かった。この日は前日より比較的緩やかなスケジュールが組まれていたが、逆に大阪-東京間を含め移動距離が長いいため、移動に伴うストレスを最小限にするよう、ヘリコプターの利用など万全の対応が取られた。

羽田空港から埼玉スタジアム2002に向かう際には、国立競技場、西が丘サッカー場の上空を通過し、機中からのインспекションを実施した。

#### ●グループリーグスタジアム視察

この日最初に訪問したのは、グループリーグスタジアムの埼玉スタジアム2002である。ここでの視察及びプレゼンテーションの骨子は、埼玉スタジアム2002で2002年大会の準決勝が行われたように、日本が提案する13のスタジアムの多くが2002年大会を契機に整備されたスタジアムであること、そして、2002年大会のレガシーとして現在も多くの観客を集め活用されていることの2点を訴求することである。

一方、FIFAのスタジアム要求基準に定められているブロードキャストコンパウンド（スタジアム隣接地に設けるテレビ中継車等のエリア）、メディアセンター、ADセンター（大会用資格認定カードの発行施設）などの施設スペースが確保可能なこと、メディア席、ホスピタリティシートについても、改修により十分に規定数を確保可能なことを伝える必要があった。

スタジアム正面玄関では、FIFA インспекションチーム一行を、犬飼委員長、鈴木文部科学副大臣、上田清司埼玉県知事、小谷野五雄埼玉県議会議長、森美秀埼玉スタジアム2002事業推進本部長に加え、浦和レッズの阿部勇樹選手、ポンテ選手が出迎えた。はじめにスタジアム内のインспекションが行われ、選手控室を視察した後ピッ

チに出た。ここでちょっとした演出が行われ、インспекションチームがピッチへの階段を上る際に、FIFA アンセム（FIFA 主催試合の際に流すテーマ曲）を流した。するとメンバーはすぐに気がつき、笑顔とともに元気よくピッチへと入場していった。

ピッチでは、ホームチーム浦和レッズの現役選手である阿部選手、ポンテ選手が、選手の視線から埼玉スタジアム2002の素晴らしさをそれぞれ述べた。

プレゼンテーションでは上田埼玉県知事、小谷野埼玉県議会議長がそれぞれ挨拶に立ち、ワールドカップの開催を訴えた。続いて丸山本部長が、プレゼンテーションスライドに沿って、埼玉スタジアム2002をはじめとする日本の提案する開催スタジアムについて、説明を行った。



FIFA インспекションチーム一行を出迎える



左から上田埼玉県知事、メイン-ニコルズ団長、犬飼委員長、鈴木文部科学副大臣

埼玉スタジアム2002 視察・プレゼンテーション参加者

所 属	氏 名 (役職)
FIFA インспекションチーム	ハロルド・メイン-ニコルズ 団長 (チリサッカー協会会長)
	ユルゲン・ミュラー (FIFA 競技部門イベントマネージメント長)
	デイビッド・ファウラー (FIFA コミュニケーション部門)
	ウォルフガング・アイヒラー (FIFA マーケティング部門)
	ジュリオ・アベラル (FIFA 競技部門)
日本政府	鈴木 寛 文部科学副大臣
埼玉県	上田清司 埼玉県知事
	小谷野五雄 埼玉県議会議長
	野本陽一 埼玉県議会サッカー振興議員連盟会長
	長沼 威 埼玉県議会サッカー振興議員連盟幹事長
	森 美秀 埼玉スタジアム2002 事業推進本部本部長
	小川倫正 埼玉県都市整備部副部長
埼玉県サッカー協会	相川宗一 埼玉県サッカー協会会長
浦和レッズ	阿部勇樹 選手
	ボンテ 選手
2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会	犬飼基昭 委員長
	丸山高人 実行本部長
	五香純典 チーフダイレクター
	平井 徹 国際部門ダイレクター
	貝瀬智洋 政府 / 自治体部門ダイレクター
	野上宏志 事業部門ダイレクター
	種蔵里美 コミュニケーション部門広報担当ダイレクター
小西あおい 国際部門マネージャー	

●抽選会場視察

日本は、抽選会候補会場として東京国際フォーラムとパシフィコ横浜の2ヶ所を提案していたが、インспекションにおいては、移動の利便性を考慮しつつ、2002年大会の予選抽選会の開催実績を持つ東京国際フォーラムを視察対象とした。インспекションチームメンバーを迎えた東京

国際フォーラムでは、プレゼンテーションに先立ち、開催地自治体である東京都を代表して、佐藤広副知事による挨拶があった。プレゼンテーションでは、優れた交通利便性、世界最大級の5,000席の客席を有するホール、最先端の施設・設備、そのほか会場周辺には数多くの最高級ホテルが存在するなどの説明が行われた。

東京国際フォーラム視察・プレゼンテーション参加者

所 属	氏 名 (役職)
FIFA インспекションチーム	ハロルド・メイン-ニコルズ 団長 (チリサッカー協会会長)
	ユルゲン・ミュラー (FIFA 競技部門イベントマネージメント長)
	デイビッド・ファウラー (FIFA コミュニケーション部門)
	ウォルフガング・アイヒラー (FIFA マーケティング部門)
	ジュリオ・アベラル (FIFA 競技部門)
東京都	佐藤 広 副知事
株式会社東京国際フォーラム	鳥海 巖 代表取締役社長
	小山 泉 営業1部長
2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会	丸山高人 本部長
	五香純典 チーフダイレクター
	平井 徹 国際部門ダイレクター
	貝瀬智洋 政府 / 自治体部門ダイレクター
	野上宏志 事業部門ダイレクター
	種蔵里美 コミュニケーション部門広報担当ダイレクター
	小西あおい 国際部門マネージャー

●総理大臣表敬訪問・総理大臣主催フェアウェル・ディナー

FIFA インспекションチームの総理大臣表敬訪問は、日本政府がFIFA ワールドカップ™日本招致を積極的に支援していることを印象付けるためにも、極めて重要な位置付けにあった。2002年大会の招致活動においても、FIFA インспекションチームが当時の村山富一総理大臣を官邸に訪問したという実績があった。

既に、政府によるワールドカップ開催の支援を約束する文書は、政府保証等「招致ブック」の一部としてFIFAに手渡されていた。しかし、官邸への表敬訪問と、併せて表敬の返礼という形での総理大臣主催フェアウェル・ディナーの開催には、それに勝る大きな意味があった。

今回の、表敬訪問及び総理大臣主催フェアウェル・ディナーの実施に当たっては、文部科学省をはじめとする関係各所との密接な連携があったことはもちろん、副大臣・政務官会議等、関係者の多大な尽力と協力により実現した。



総理大臣官邸

午後6時15分、FIFA インспекションチーム及び日本招致委員会幹部が総理大臣官邸に到着。菅直人総理大臣から、FIFA インспекションチームメンバーに対し歓迎の挨拶が行われた。これを受け、メイン-ニコルズ団長から返礼の挨拶があり、記念品が菅総理大臣に手渡された。その後、記念写真の撮影が行われ、懇談に移った。



談笑するメイン-ニコルズ団長(中央左)と菅総理大臣(中央右) 左は犬飼委員長 右は川端文部科学大臣

午後6時45分からは、FIFA インспекションチームの表敬訪問に対する返礼として、総理大臣主催フェアウェル・ディナーが開催された。ディナーには、表敬訪問の出席者に加えて財界からのゲストが出席し、官民を挙げて2022年FIFAワールドカップ™の日本招致を支援していること、及び国民の大会開催への期待の高まりを表明した。

冒頭、菅総理大臣の挨拶、続いてメイン・ニコルズ団長の挨拶があった後、川端文部科学大臣の乾

杯の発声で宴が開催された。宴は鈴木文部科学副大臣の進行により執り行われ、終始和やかに歓談が行われた。最後に、招致委員会を代表し犬飼委員長が感謝の挨拶を行い、午後7時55分に散会となった。



総理大臣主催フェアウェル・ディナーで挨拶に立つメイン・ニコルズ団長

総理大臣表敬訪問 訪問者及び出席者

所 属	氏 名 (役職)
日本政府	菅 直人 内閣総理大臣
	仙谷由人 内閣官房長官
	川端達夫 文部科学大臣
	古川元久 内閣官房副長官
	福山哲郎 内閣官房副長官
	武正公一 外務副大臣
	鈴木 寛 文部科学副大臣
FIFA インспекションチーム	ハロルド・メイン・ニコルズ団長 (チリサッカー協会会長)
	ユルゲン・ミュラー (FIFA 競技部門イベントマネージメント長)
	デイビッド・ファウラー (FIFA コミュニケーション部門)
	ウォルフガング・アイヒラー (FIFA マーケティング部門)
	ジュリオ・アベラール (FIFA 競技部門)
2018/2022年FIFAワールドカップ™日本招致委員会	犬飼基昭 委員長 (JFA 会長)
	岡野俊一郎 顧問 (JFA 最高顧問)
	小倉純二 副委員長 (JFA 副会長)
	大仁邦彌 副委員長 (JFA 副会長)
	田嶋幸三 JFA 専務理事
	丸山高人 実行本部長
	五香純典 チーフダイレクター

8.2.5 Day3 (7月22日 (木))

インспекション最終日となる Day3 には、日本の大会構想の詳細を説明する招致プレゼンテーションが予定されていた。プレゼンテーションは、「未来へのプレゼンテーション」として、日本が提案する新しいテクノロジーを実際に体験してもらうことにより、次世代ワールドカップの実現を図る大会構想への理解を深めることを狙っていた。

これまでのロビー活動においては、日本が提案する次世代ワールドカップの概念を、FIFA 理事に対し必ずしも十分理解させるにいたってはいなかった。特に、次世代ワールドカップを実現するための新しいテクノロジーについては、技術的な解説が必要なため、口頭での説明や文書での説明にはおのずと限界があった。

そこで、この機会をとらえ、プロトタイプモデルのデモンストレーション機等を用いた“体験”を通じて、新しいテクノロジー及びそれを包括する日本の大会構想への理解を深めてもらうとしたのである。FIFA 理事の理解を得るためには、まず、FIFA 事務局員であるインспекションメンバーの理解を得ることが、絶対条件である。

会場内には、最先端技術を保有する国内企業各社に協力いただき、最先端のデモンストレーション機材が運び込まれ、展示された。翌日に控えた招致プレゼンテーションのため、招致実行本部スタッフの準備作業は深夜にまで及んだ。

●招致プレゼンテーション

招致プレゼンテーションは、午前9時から、ザ・リッツ・カールトン東京 グランドボールルームで行われた。会場内へは、関係者以外の立ち入りが厳しく制限され、通常行われるメディアによる冒頭撮影も禁止された。

この日のプレゼンテーションには、国内各企業の協力により、最先端テクノロジーを用いたデモ

ンストレーション機材が展示されていた。なかには、これまで一切公表されていない最高機密に類する技術も含まれる。各企業の出展に当たった条件は、メディアをはじめ招致関係者以外への機密厳守であった。これは、日本の提案内容が他の招致国に漏れることを恐れたのではなく、各企業の技術情報が流出することを妨げるためにとられた措置であった。

プレゼンテーションは、以下に示す5部構成により行われた。

- Part1：日本の開催能力
- Part2：サッカーコンテンツの革新
- Part3：ファンフェストの革新
- Part4：CSR (Corporate Social Responsibility) 次世代教育活動の革新
- Part5：結び

「Part1：日本の開催能力」では、丸山実行本部長が説明に立ち、後半の未来に向けてのプレゼンテーションの導入として、安全、交通・輸送インフラ、環境対策など、ワールドカップ開催に際しての基本的な能力についてスライドを用いながら説明した。

次に、これまでに日本で開催したワールドユース選手権、U-17 世界選手権、FIFA クラブワールドカップなど、FIFA 主催大会を列挙し、世界のサッカーの発展に貢献してきた実績を示した。さらに、アジア地域におけるサッカーの普及・競技力の向上のために実施してきた「AFC プロリーグプロジェクト」、「JFA DREAM ASIA PROJECT」、「公認指導者・審判インストラクター派遣事業」、「JFA インターナショナルコーチングスクール」など、JFA の取り組みについて説明した。

「Part2：サッカーコンテンツの革新」からは、五香チーフダイレクターが説明に立った。

最初に Freeviewpoint Vision (フリービューポイント・

ビジョン)を紹介。会場内に設置されたスクリーン上の画像を、コントローラーを使って視点を動かし、360度のあらゆる角度から選手の動きを捕らえることが可能であることを実証して見せた。

次いで、Full Court 3D Vision (フルコート・スリー・ディー・ビジョン)のプレゼンテーションでは、会場内に用意した平置き3D映像機材、360度立体ディスプレイ、リアルタイム3Dカメラ&ディスプレイなどのデモンストレーション機材を紹介しながら説明を行った。インスペクションチームメンバーにも、それぞれの機材を実際に操作してもらい、体験を通じて理解の浸透を図った。

さらに、FIFA Hyper Application (FIFA ハイパーアプリケーション)では、世界中のサッカーファンが、言語や文化を越えて豊かなコミュニケーションを育むと同時に、FIFAのワールドカップビジネスの成長戦略に貢献する、と説明した。

続いて、日本招致委員会ヒューマニティ&テクノロジー部会長の村井純慶應義塾大学環境情報学部部長が登壇し、

「いまご覧に入れた未来への提案は、決して夢物語ではなく、既に実現に向けて動き出したものです。日本のICT (Information and Communication Technology) 技術や映像技術は、世界の最先端にあります。これらの技術をさらに伸ばし、世界のコミュニケーション技術やコンテンツ産業の更なる発展に向けたエンジンであり続けることは、21世紀における日本の重要な役割です。

このような技術で、日本がFIFAワールドカップ™に貢献できるということはこの上ない喜びです。それは、サッカーが単なるエンターテインメントであると言うだけでなく、人の心を動かし、世界を結ぶ架け橋として、そしてその先にある平和な世界を子供たちに提供するものだ、私たちが自身が知っているからです。」

と述べるとともに、今後の研究開発のプランについて情熱を込めて語った。

「Part3: ファンフェストの革新」では、世界400ヶ所で展開し、3億6000万人の参加者が見込まれる Universal Fan Fest in 208 Nations (ユニバーサル・ファンフェスト・イン208ネーションズ)の実施内容、及びその大会レガシーとしての価値について説明を行った。

これに基づき、ヒューマニティ&テクノロジー部会員で㈱シンク代表取締役社長の森祐治氏が、Universal Fan Fest in 208 Nationsの実現手法、資金調達、ビジネスモデルなど、計画のフィジビリティ (実現可能性) についての説明を行った。

「Part4: CSR 次世代教育活動の革新」では、Freeviewpoint Vision、Full Court 3D Visionなどの超臨場感技術、及びFIFA Hyper Applicationで示したコミュニケーション技術を用い、世界中で展開する Universal Fan Fest in 208 Nationsを活用した、世界規模の次世代教育プログラムを展開することを説明した。また、次世代教育プログラムは、招致活動のために考え出されたアイデアではなく、既に2007年からJFAが実施している「JFA こころのプロジェクト」をベースに、その経験とノウハウを最大限に活用し、全世界に展開するものであるとの説明を行った。

次に、「JFA こころのプロジェクト」の事業内容、事業実績を説明した後、「夢の教室」のドキュメンタリー映像を会場内に流した。



招致プレゼンテーション会場風景

「夢の教室」映像の感動が会場内を静寂に包むなか、川淵三郎 日本招致委員会顧問 (JFA 名誉会長) がスピーチに立った。

#### 川淵三郎 顧問スピーチ (要旨)

私は、この「こころのプロジェクト」を創設し推進してきた責任者の一人です。サッカーに関係している者のひとりとして、サッカーもまた社会に大きな責任があると考えています。子供たちには無限の可能性があります。感受性の強い子供たちにはできるだけ多くの刺激を与えて将来よい方向に進んでいけるようにしていきたい。「夢の教室」では、教室が終わったあと、子供たちから夢先生に手紙を書きます。子供たちが「夢の教室」で心から感じたことを書いてくれます。この手紙を読むたびに、私は、この「こころのプロジェクト」を始めて本当によかったと思います。

いま、一通の手紙が私の手元にあります。ある小学校5年生の女の子の手紙をご紹介します。「私は、クラス全員の女の子からイジメを受けています。一度本当に死にたいと思ったこともありました。今日、夢先生のいろんな挫折や苦悩を乗り越え、自分の夢だったプロのサッカー選手になって成功したことを聞いて、私もせっかく見つけた夢に一生懸命近づこうとがんばっていきたく思います。医者になって人を幸せにして人の役に立ちたい。そういう気持ちを持っていればイジメとか、今つらいことでも乗り越えられると思います。先生、本当にありがとうございました。」

この手紙でおわかりのように、内容は子供たちの人生や生き方、明日への希望ということにまでいたっています。

世界は、国によって社会状況が千差万別で、子供たちも全く違う環境で生きています。しかし、我々が提案している FIFA ワールドカップ™を機会として行われる次世代教育プログラムで、208それぞれの国や地域の子供たちひとり一人が、自分の夢を持つこと、それに向かって一生懸命頑張ることの大切さを学び考えることは、大きな意味があると思います。

さらに、他の国の子供たちも肌の色や言語や文化が違って、夢を持って、大きな希望を持って生きることにおいては違いはないと感じることでしょう。日本はサッカー、FIFA ワールドカップ™の可能性をそこまで考えています。

川淵顧問のスピーチの後、五香チーフダイレクターが、次世代教育プログラムの中核をなす 208 Kids Dream Workshop (208 キッズ・ドリーム・ワークショップ)、208 Kids Dream Japan Tour (208 キッズ・ドリーム・ジャパントア)、それぞれについてのプログラム内容、プログラム実施の意義及び価値

について詳細な説明を行った。

こうしてすべてのプレゼンテーションを終了した後、FIFA ワールドカップ™南アフリカ大会で、日本代表チームをベスト16に導き、前日、招致アンバサダーに就任したばかりの岡田武史 前日本代表監督が、スペシャルスピーカーとして登壇した。

岡田武史 招致アンバサダー（前日本代表監督）スピーチ（要旨）



岡田武史 招致アンバサダー（前日本代表監督）

おはようございます。

私は日本代表チームの監督として、98年のフランスワールドカップと今回の南アフリカの2大会に出場しました。98年は日本が初めてワールドカップに出た大会で、私も41歳と若く、経験不足もあり予選リーグで3連敗をしました。その後、フランスに残って大会を視察させてもらったのですが、忘れられない光景があります。

それは決勝戦が終わって、フランスが優勝を決めた時、100万人という人達がシャンゼリゼ通りを埋め尽くし、人々が国旗を振ったり熱狂している姿でした。おかげで私はタクシーを降りて通りを横断してホテルに帰らなければならなくなったのですが、人々の心を一つにさせ、これほど人々を熱狂させられるワールドカップって本当にすごいなと思いました。

あれから12年、2002年の日韓共催の大会を経験したりして、日本のサッカーは確実に進歩してきました。それはワールドカップで勝つことを夢見た多くの指導者、選手、関係者の思いの集結でした。おかげで、我々は南アフリカでベスト16に入ることが出来ました。

日本では、シャンゼリゼほどとは言いませんが、多くの若者が深夜にもかかわらず街に集まり、熱狂していたそうです。本当にうれしいことです。物が豊かな日本の社会の中で、閉塞感にさいなまれていた若者達が、その閉塞感を打ち破る可能性を知り、チャレンジする勇気を掴み、目を輝かせていたそうです。

私は、世界中の若者の目を輝かせようという日本の提案に共感し、アンバサダーを引き受けました。

それと共に、私は環境活動を30年以上やっていますが、環境問題の根本でもある人口爆発を考えてみてください。1900年に15億だった地球の人口は、50年後の1950年には30億、2000年には60億と倍々になり、現在68億人といわれています。人口が増えると共に地球が大きくなればいいのですが、残念ながら地球は大きくなりません。このまま行けばどうなるか？誰が考えても行き着く先が想像できると思います。

どうすればいいのか、人類がお互いを認め合い尊重し合い、いや人類だけでなく自然の中で共生、つまり共に生きていかなければなりません。これは対戦相手を尊重し、開催国と共に盛り上げるというワールドカップそのものではないでしょうか？

地球で一番愛されているスポーツ・サッカーが、世界最大のワールドカップという偉大なる大会を通して、地球を一番愛しているスポーツであることを全世界に発信する、これが日本でワールドカップを開催することだと思っています。

最後に、犬飼委員長が結びの挨拶として、「ただいまご説明しましたように、日本は独自の提案をしています。

その独自性は、1. レガシー、2. CSR活動を、開催国のみならず、世界中に広げていくことです。さらに、理念だけではなく実行プランにしていることです。

これは未来のFIFAワールドカップ™のあるべき姿だと考えています。

12年後の開催国を決めるということは、10数年後のFIFAワールドカップ™とサッカーの発展を決めるということ、と強く考えています。

ぜひとも、FIFAの中長期戦略に照らし合わせていただきたい。

208 Smiles という理念は、まさにその戦略にドライブをかけていく提案と考えます。

FIFAが、世界のスポーツ、国際社会をリ

ードし続けるために、日本は持てる力のすべてを結集し、未来を創っていく所存です。」と述べて、日本の提案への理解を求めた。

犬飼委員長に続いて、FIFAインспекションチームを代表して、メインニコルズ団長が挨拶に立った。団長は、「調査団として公平な立場を保つため、招致各国の個別の評価は避ける」、と前置きをしつつ、

「日本の提案は、非常にバランスの取れた、優れたものであり、プロフェッショナルな仕事に大変感銘を受けている。

特に、最後に提案された「こころのプロジェクト」は、This is Real Football、まさにこれこそがサッカーそのものがある。

私が会長を務めるチリサッカー協会でも、すぐに実施したい。」と、最大級の賛辞を述べた。

招致プレゼンテーション出席者

所 属	氏 名（役職）
FIFA インспекションチーム	ハロルド・メイン-ニコルズ団長（チリサッカー協会会長）
	ユルゲン・ミュラー（FIFA 競技部門イベントマネジメント長）
	デイビッド・ファウラー（FIFA コミュニケーション部門）
	ウォルフガング・アイヒラー（FIFA マーケティング部門）
	ジュリオ・アベラール（FIFA 競技部門）
日本政府	鈴木 寛 文部科学副大臣
2018/2022 年 FIFA ワールドカップ™日本招致委員会	犬飼基昭 委員長
	川淵三郎 顧問
	小倉純二 副委員長
	大仁邦彌 副委員長
	田嶋幸三 JFA 専務理事
	丸山高人 実行本部長
	五香純典 チーフダイレクター
	平井 徹 国際部門ダイレクター
	林 信貴 コミュニケーション部門ダイレクター
	野上宏志 事業部門ダイレクター
種蔵里美 コミュニケーション部門広報担当ダイレクター	
小西あおい 国際部門マネジャー	
日本招致委員会ヒューマニティ&テクノロ	村井 純 部会長（慶應義塾大学環境情報学部部長・教授）
ジー一部会	森 祐治（株）シンク代表取締役社長
オブザーバー	出展企業 5 社
	岡田武史 招致アンバサダー（前日本代表監督）

● FIFA インспекション総括ブリーフィング

午後1時から、会場をプレゼンテーション会場隣のボールルームⅠⅡに移し、メディアブリーフィングを行った。84席用意した座席はすべて埋まり、立ち見する多くのメディアがあり、FIFA インспекションへの関心の高さが伺えた。

壇上に上がったメイン-ニコルズ団長は、「日本の提案は、非常にバランスの取れた優れたものであり、プロフェッショナルな仕事であると大変感銘を受けている。また、インспекションの準備は完璧であり、期間中をとおして快適に過ごすことができた。このインспекションに携わったすべての方々に感謝したい。」と述べた。

続いて挨拶に立った犬飼会長は、「無事にインспекションのすべての日程を終了することができた。また、本日午前中に行われた招致プレゼンテーションにおいて、確かな手ごたえを感じることができた。」と力強く述べた。

メイン-ニコルズ団長と犬飼会長は壇上で固い握手を交わし、写真撮影が行われた。

次に、スペシャルゲストとして「キャプテン翼」の作者である高橋陽一氏が登壇し、メイン-ニコルズ団長をはじめとするインспекションチームメンバーに、それぞれの似顔絵を描いた色紙がプレゼントとして手渡された。メンバーは満面の笑顔で、カメラに向けて自らの似顔絵が描かれた色紙をかざした。

引き続き行われたブリーフィングでは、田嶋 JFA 専務理事、丸山実行本部長が挨拶と報告を行い、質疑応答に対応した。



メイン-ニコルズ団長と握手を交わす犬飼委員長



高橋陽一氏による似顔絵を手に見せる FIFA インспекションチーム・メンバー

8.3 FIFA インспекション対応

FIFA インспекションの受け入れに際しては、政府をはじめ開催地自治体や関係機関の全面的な協力・連携体制のもと、準備が進められた。また、日本招致委員会実行本部においては、すべてのスタッフがインспекションの準備及び実施に対応する、臨戦体制がとられた。

8.3.1 政府への協力要請

FIFA インспекションにおいて、政府の関与は極めて重要な要素である。日本政府は、政府の宣言、政府保証など、既に政府として大会の招致及び開催に協力する旨の表明を、「招致ブック」の一部として行っていた。しかし、視察への帯同あるいは総理大臣主催のディナーなど、インспекションへの直接的関与は、そうした文書の提出以上に、政府のワールドカップ招致への熱意を伝えるものである。また、インспекションチームに好印象を与えると同時に、大会の日本開催に安心感を提供することができる。

他の招致国においても、米国ではオバマ大統領がブラッター FIFA 会長宛に開催を熱望する書簡を送り、イングランドではブラウン首相が招致費用の一部を支援することを表明するとともに、ウイリ

アム王子が招致を支援している。また、ロシアはプーチン大統領がスポーツ担当大臣に招致活動を指示したとされる。

このように、いずれの招致国においても国家元首による招致支持、大会開催への支援を、招致活動の重要なファクターとして位置づけている。

日本では、2009年12月8日に閣議了解がなされ、政府として正式に招致活動を支援することを約束していた。また、2009年12月7日及び2010年5月10日には関係副大臣・政務官会議が開催され、関係する省庁の協力体制が確認されていた。

こうした緊密な連携・協力体制を背景に、FIFA インспекションの実施に当たっては、政府関係機関に対し、下表に示す事項の協力を要請した。

なお、鈴木寛 文部科学副大臣には、7月20日 Day1 の概論ミーティング、論点ミーティング、開幕・決勝スタジアムミーティングに参加いただいたほか、7月21日 Day2 には埼玉スタジアム2002 視察、総理大臣表敬訪問、総理大臣主催ディナー、そして7月22日 Day3 には、招致プレゼンテーション及び総括ブリーフィングまで帯同いただいた。

このことは、日本招致委員会にとって極めて大きな力となったばかりでなく、日本が国を挙げて招致活動を推進していることを、FIFA に対し強力に印象づけることができた。

FIFA インспекションの受入にあたっての主要関係団体依頼先（依頼事項）一覧

依頼先	依頼内容
文部科学省	大臣（副大臣）のインспекションへの参加、関係省庁への協力依頼文の展開等
内閣官房	表敬訪問、夕食会設定
財務省・所轄税関支署	出入国に関する円滑化対応
法務省・所轄入国管理局	〃
厚生労働省	〃
農林水産省	〃
外務省	査証発行に関する円滑化対応
国土交通省・所轄航空局	視察団のヘリ移動に係る着陸許可等に関する協力
関西国際空港（株）	出入国に関する円滑化対応（関係者用動線の利用等）
大阪国際空港ターミナル（株）	関係者用動線の利用等
日本空港ビルディング（株）	出入国に関する円滑化対応（関係者用動線の利用等）
大阪市	諸施設におけるインспекション受入対応
堺市	〃
埼玉県	〃
東京都	〃

### 8.3.2 開催地自治体の協力

開催地自治体への協力要請については、前記の表に示したように、関係する大阪市、堺市、埼玉県、及び東京都に対して行った。いずれの自治体においても、FIFA インспекションの重要性を理解するとともに、最大限の協力をいただくことができた。

そのため、各自治体施設の視察に当たっては、円滑な説明・運営が実施され、なんら問題は発生しなかった。

なかでも、開幕・決勝戦開催候補都市である大阪市は、関西国際空港でのFIFA インспекションチームの出迎えから、概論ミーティング、開幕・決勝スタジアムミーティングでの平松市長によるプレゼンテーション、大阪市公館での大阪財界人を招いての歓迎ディナーなど、日本招致委員会と一体となって、積極的な招致活動を実施した。

特に、開幕・決勝スタジアムのミーティングでは、現存しない「大阪エコ・スタジアム（仮称）」

を、いかにリアリティを持って説明するか苦心したが、直前に作成したジオラマ模型により、インспекションメンバーの理解を促す大きな効果が得られた。

また、FIFA インспекション期間中を含む7月17日から31日にかけては、大阪市役所の壁面に巨大な横断幕を掲出。7月13日から21日には、大阪市営地下鉄12駅構内に、日本招致委員会と共同でポスターを掲出するなど、FIFA インспекションの大阪視察に合わせ、市民の機運を盛り上げるとともに、FIFA に対して大阪の熱意をアピールした。

加えて、大阪城西の丸庭園におけるファンフェスト会場視察では、大阪セレッソのサポーター、キッズが多数参加するとともに、2022年の大阪でのワールドカップや12年後の夢について綴った大阪市の子どもたち45,000人のメッセージを、FIFA インспекションチームに手渡すことができ、会場での大きな盛り上がりを見せることができた。



大阪市役所の壁面に掲出された巨大な招致横断幕

### 8.3.3 インспекションにおける運営体制

FIFA インспекションの受入れ準備及び実施に際しては、招致実行本部としての通常業務を実施しつつ、平行して行う必要があった。限られた人員の中でインспекション対応業務を行うため、実行本部の全スタッフが投入された。

ここでは、FIFA インспекション対応業務にかかる、招致委員会実行本部の体制及びその実施内容について言及する

#### ●フルアテンド制の採用

FIFA インспекションチームメンバーとのリレーションシップを構築するため、メンバー5名に対し、それぞれマンツーマンで対応するフルアテンド制を導入した。アテンド対応者は、それぞ

れ相対するメンバーと信頼関係を築く一方、視察中におけるメンバーの要望等を把握、あるいはメンバーが明かす極秘の情報を的確にとらえるなどのミッションが与えられた。

アテンド対応者の設定に当たっては、メンバーの担当業務と対応者の担当業務との関わりからの接点を重視したほか、年齢や事前の調査により得られた性格等を考慮に入れ設定した。

基本的には、アテンド対応者が日本滞在中におけるメンバーのすべての状況を把握し、対応することとなった。

さらに、アテンド対応者をサポートする形で、以下の各チームが編成された。

#### FIFA インспекション対応運営体制

チーム	実施業務
アテンド対応者	インспекションチームメンバーとのリレーションシップ構築及びアテンド
プレゼンテーションチーム	プレゼンテーション素材（原稿・映像等）の作成、及びバックアップデータの作成・管理
ベニュー対応チーム	各視察ポイントにおける現地関係機関及び関係者との調整
運営・設営チーム	各視察ポイントにおける施設設営及び運営
メディア対応チーム	インспекション期間中におけるメディアブリーフィング等メディア対応
ロジスティクスチーム	インспекションチーム及び招致委員会関係者の宿泊・交通・輸送に関わる業務

#### FIFA インспекションチームメンバーアテンド対応者

FIFA インспекションチーム	アテンド対応者（実行本部）
ハロルド・メイン・ニコルス 団長（チリサッカー協会会長）	丸山 高人 実行本部長
ユルゲン・ミュラー（FIFA 競技部門イベントマネジメント長）	五香 純典 チーフダイレクター
デイビッド・ファウラー（FIFA コミュニケーション部門）	野上 宏志 事業部門ダイレクター
ウォルフガング・アイヒラー（FIFA マーケティング部門）	小西 あおい 国際部門マネージャー
ジュリオ・アベラール（FIFA 競技部門）	平井 徹 国際部門ダイレクター

## ●プレゼンテーションツール

概論ミーティング、招致ミーティングなど、ホテルの会議室等で多数の人々を対象に行うプレゼンテーションでは、設置したスクリーンにコンピュータから出力した画像・データを映写し実施した。しかし、プレゼンテーションの場は必ずしも会議室の中だけではなく、移動中のヘリコプター、あるいはバスの車中でも行われた。その際に威力を発揮したのがiPadである。

あらかじめプレゼンテーションに必要な画像、データを取り込んでおき、説明が必要なときに適宜情報を取り出して提供するなど、機動的なツールとして活用することができた。

iPadには、インспекションチームメンバーからのあらゆる疑問、質問に対応するため、スタジアムデータ、各施設情報など、膨大なデータが収納された。

また、プレゼンテーションで出された質問等で、即座に回答することができない項目については、翌朝までにクラウド・コンピューティング・サービスにより情報を提供することとした。質問が少なかつたせいもあり、威力を発揮する機会は少なかつたが、FIFA メンバーからは、非常に効率的であると高い評価を得た。

プレゼンテーションに際し、こうした最新のテクノロジーを活用したのは、日本の提案がFIFA Hyper Application (FIFA ハイパーアプリケーション) はじめ、最先端のICT技術を駆使したものであることから、日本には既に、高度なICT技術に対応する通信インフラ等の環境が整っていることを印象づけようとしたためである。

## ●ロジスティクス

FIFA インспекション・ビジットは、3日間という短期間の間に、スタジアム、FIFA 総会会場、IBC 会場、抽選会会場などを訪問する必要がある。一方では、過密なスケジュールによって、インス

פקションメンバーにストレスを与えることは避けなければならなかつた。そのため移動手段、移動ルート、宿泊場所等の設定に際しては、細心の注意が払われた。

移動手段については、大阪－東京間の移動は航空機、関西国際空港－大阪市内及び東京都内－埼玉スタジアム間の中距離移動はヘリコプター、大阪市内及び東京都内の短距離移動にはバスを用いた。ヘリコプターは雨天等の視界不良の場合飛行できないため、当該区間の移動に際してはバス移動も想定しスタンバイさせた。

バス利用の移動ルートについては、事前に混雑状況を十分に調査し、渋滞等でスケジュールに変更が生じないよう考慮した。

当初、大阪－東京間の移動に新幹線を利用する案も検討された。新幹線は、「招致ブック」にも記載したように、移動時間、安全性、正確性、輸送キャパシティなど、他国に対して大きなアドバンテージがある。しかし、7月21日は、埼玉スタジアム2002の視察、総理大臣表敬訪問などの予定があり、時間的に余裕がないため航空機を利用することとなった。

宿泊施設の選定については、視察ポイントとしてのFIFA本部ホテルを考慮し、あらかじめFIFA本部ホテルとしての要件を満たすホテルをリストアップし、その後に移動ルート、インспекション実施に際しての利便性などを考慮し決定した。

## ●メディア対応

FIFA インспекション期間中における、インспекションチームメンバーに対する取材、撮影等については、あらかじめFIFAから規制がかけられていた。これはFIFA インспекションを滞りなく実施するために設けられた規制であった。

招致実行本部は、こうしたFIFAからの事前の申し合わせがあったこと、及び視察中に混乱が発生

することを避けるため、下記に示す要請文をメディア各社に送付した。併せて、取材を希望するメディアに対しては、事前登録制を取ることにした。

## FIFA インспекション期間中のメディア対応について

## &lt; FIFA インспекション期間中のメディア対応について &gt;

期間中のメディア活動につき、FIFA より以下リクエストをいただいています。  
あらかじめご承知置きくださいますよう、お願いいたします。

- ・FIFA は各招致国で一切質疑応答に応じない。各招致国の比較や詳細に関するコメントはしない。
- ・招致側がFIFAを代弁すること、視察の際にFIFA視察団が発したコメントを話すことはあってはならない。
- ・プレゼンテーションルームや視察会場内の取材は不可。移動中や会場の出発・到着時の撮影、パブリックスペースでの撮影は可能。

2010年7月19日(月・祝)

来日時記者ブリーフィング

登壇者： ハロルド・メイン-ニコルズ団長  
小倉日本招致委員会副委員長／JFA副会長／FIFA理事  
平松大阪市長  
荒木大阪市会議長

2010年7月20日(火) 12:00～12:40

日本招致委員会／大阪市 合同記者会見

登壇者： 犬飼日本招致委員会委員長／JFA会長  
小倉日本招致委員会副委員長／JFA副会長／FIFA理事  
鈴木文部科学副大臣  
平松大阪市長

2010年7月22日(木) 12:30-12:45

FIFA インспекション総括プレスブリーフィング<第一部>

登壇者： ハロルド・メイン-ニコルズ団長  
犬飼日本招致委員会委員長／JFA会長  
高橋陽一先生(キャプテン翼作者)

2010年7月22日(木) 12:50～13:30

FIFA インспекション総括プレスブリーフィング<第二部>

登壇者： 田嶋JFA専務理事  
丸山日本招致委員会実行本部長